
機動戦士外伝『フィクション』

神風紅生姜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士外伝『フィクション』

【Nコード】

N1382Y

【作者名】

神風紅生姜

【あらすじ】

これは宇宙世紀に生まれた無名の作家が書き上げた物語。

何処か現実味を帯びたそのストーリーはまるで預言書か…

果たして歴史上の真実になりうるか否か。

それを知る者はいない…

序章（前書き）

太陽系に一基で三千万人が暮らせるスペースコロニーが数百点存在する宇宙移民達成後の未来。

宇宙世紀0089年。

宇宙の統治権を争って太陽系に点在するコロニー大半を巻き込んだ大戦を人類は経験した。

そんな時代に暮らす一人の作家志望の女性が書いた物語。

その物語を読んだ人々は時代を次のステージへ導く様に動き出す。

その中に“赤い”異名を持つ元軍人も…

序章

日当たりが悪く薄暗い部屋に本のページをめくる音だけがペラペラと響く。

「もう終わりか…」

男は静かに本を閉じる。

時計を見ると時刻はもう昼を過ぎていた。

あの店はもう開店してるので散歩がてら別の本を買いに行こう、あの埃っぽい店に。

男は黒革のソファから立ち上がると丸テーブルの上に置いてあったマグカップを手にとり、少しだけ残ったブラックコーヒーを一気に飲み干した。

クローゼットに向かう、中からグレーのジャケットを取り出して羽織ると、その姿は彼の実齢とは不釣り合いに老け込んだ印象になる。カウンターに置いてある財布や鍵をポケットに入れて玄関へ、履き古した茶色い革靴に足を滑らせると男はワンルームの部屋のドアを開ける。

表に黒いスーツを纏った体格のいい男。

「出かける」

「お車は？」

「近くを散歩するだけだ」

「お供します」

「本を買いに行くだけだ、それにお前は人相が悪い」と苦笑交じりに言うと「では、少し距離をとります」と言い残し黒服は歩いて何処かに姿を消す。

すると強い突風が吹いた。

悪戯好きな暖かい春の風。

男はそれを全身で受ける。

風は男の背中を強く押す。

まるで何かに導く様に…

宇宙の浮島に吹くはずの無い季節風に男は一瞬疑問を抱いたが、たいていして気に留めずに男は風の向かった方に歩き始めた。

近くにある街路樹の桜を見ると、いつ花が開いてもおかしくない程に蕾を大きくしている。

通り過ぎて行く人の顔や景色さえも、男はとても穏やかに感じた。

ここまで穏やかな時は、おそらく幼い頃の妹と過ごした日々以来だろうと。

「まるで嘘のようだ」

いくら中立のコロニーと言ってもここまで人々の顔が穏やかだとアノ戦争も大昔のようだ。

そんな事を考えながら町を眺めて歩き続け目的の店に着く。

いつ来ても商売をやっているとは思えない静寂に包まれた店。おまけに埃っぽい。

店頭に積まれた小汚い本の山は『ご自由にお持ち下さい』と言わんばかりだ。

「おーい」

店の奥に声をかけるとすぐに若い娘が間口まで出てくる。

「あらお客さん！ もう読んじやったの！？」

「あいにく暇を持て余していてな」

男がこの古本屋に通い始めたのは3週間前。

休養はいいが仕事以外で趣味らしいものがなく『とりあえず本を読んで過ごそう』と思い、店へ来る度に五巻ほど彼女のオススを購入する。

つい先日にも本を購入したばかりなのでそう言われても当然だ。

「オススの本は有るかね」

「じゃあ…」と彼女は奥に戻り、店番の机脇に置かれていた一冊を持ってきた。

それは本と呼ぶよりもノートか日記帳の方が正しいかもしれない。

「それは何だ？」

「私が書いたんです」と嬉しい様な恥ずかしい様な顔を見せる。

その笑顔が眩しい。

「ホントか？ 凄いな」

「私の書いた小説がやっと認められて嬉しくて、勝手に自分で製本したんです」

「よかったじゃないか」

彼女の事が素直に嬉しかった。

「どんな物語なんだ？」

「なんででしょう？ 一応戦争をテーマに書いたのですが、ぶっちゃけ純愛になるんですかね」と彼女がはにかむ。

彼女は作家志望の19歳で地道な執筆活動をしながら小遣い稼ぎに知人の古本屋の留守を任されていると語る。

彼女いわく『古本屋の仕事は、古きよき時代の名作と、読者の素直

な感想が聞ける最高の場!』だと。

「純愛か…、私には向かないよ」

「後悔はさせませんよ」

軽やかな言葉だったが、どこか自信を秘めた言葉に感じる。

若者のチカラというものかも知れない。

彼女は「是非感想を聞かせて下さい」と男に本を押し付けると店の奥に姿を消した。

「おいおい、店番が奥に引っ込んでいいのか？ 表に積んである本が盗まれるぞ？」

「表の本は沢山刷られた本なので価値は無いんです。だから持つていつてくれた方が在庫が減って助かります」

たいした言い分だ。

「わかったよ、読み終えたらまた感想を聞かせに来る」店の奥にも届く様に声をかけると男は店を後にした。

少し歩いてから男は「もう出て来ていいぞ」と何処にかけるでもなく呟く、すると男の後方7〜8メートル離れた小路から黒服が「流石は大佐ですね」と自笑気味に現れる。

「バレバレだよ、もう戦争は終わったのだから少しは肩の力を抜け」

「ならば何故大佐には私の様な監視役が付いているのでしょうか？」

「どこぞかの腹黒い奴らが、また私を利用する為だろう」

蕾を膨らまして春を待つ桜の街路樹を横目に二人は肩を並べて歩いていく。

「ちょっと寄り道するぞ」

「ハイ」

歩き続けていくと徐々に人氣が無くなっていき、ほとんどの店のシヤッターが閉じた寂れた商店街に入る。

男は黒服を先導する様に先を歩く、そして商店街の一番端の店の前で立ち止まり「ここだ」と黒服に告げた。

店は木製の小さなテラスを設けた喫茶店、ドアは閉じていたが中はクラシック音楽が大音量で鳴っている様子が伺える。

金色のドアノブを握り、ゆっくり開ける。

すると中で響いている大音量の音楽が二人の耳に襲いかかる。

「相変わらずだな、客が来たぞ」

男はカウンターで音楽にあわせて両手を振り指揮をとる熊髭の大男に声をかけるが、大音量の音楽に掻き消され何を言っているか伝わっていないだろう。

熊髭は察して音量を下げる。

「これはこれは大佐殿、失礼しました」

「今はただの男だよ、監視付きだがな」と黒服の方を見て皮肉に笑う。

「ご注文は？」

「ブレンドをブラックで、お前は？」

「同じものを」

テラス側から射す陽光が当たるテーブルの席に男と黒服が座り、男は手にしていた本をテーブルに置く。

熊髭はコーヒーを淹れながら話かける。

「今日は何を読んでいるのですか？」

「今朝一冊読み終えてしまっとな、確かチェーホフの本だったが、タイトルを忘れてしまった」と軽く自笑。

黒服も軽く笑いながら「片っ端に読み漁るからですよ」と。

熊髭はガハガハと大口を開けて笑い「では今日お持ちのソレはまた別の本ですな」と合点した。

しばらくして熊髭がコーヒーカップを乗せた小さな丸いトレイを持ってくる。

「お待たせしました」

大柄で熊髭を生やした男がエプロン姿でやるソレは、いつ見ても可笑しなものだ。

カチャカチャとカップとソーサーを鳴らしてテーブルに置く動作までくると男は思わず笑いそうになる。

「今回の中々良い豆が入ってますよ」

「どうせまた地球産の密輸品を、ブラックマーケットで仕入れたんだろ」と黒服に指摘されると熊髭は『バレたか』と言わんばかりにガハガハ笑い。

「お前らしいな」

「ですかね、ではごゆるりと」

熊髭はソレだけ言うのとトレイを小脇に持ちカウンターに戻る。

「それじゃあ彼女の作品を拝見するか」

男はテーブルに置いていた本を手に取り最初のページを読み始める…

フィクション（前書き）

母なる大地に足をつけ天に舞う鳥達を見上げ夢見た人類は、いつしか天空を音よりも速く翔け夜道を優しく照らす月にまでたどり着く。

しかし人間の欲望に満ちた心は月だけに留まらず太陽系から遙か彼方離れた銀河までも求めた。

この物語は人類の未来を賭けた大戦を幾度と経験しても尚、欲望と野心に満ちた人類が作り作り上げてしまった。

一つの悲しい愛の物語…

フィクション

『活きる為に必要なモノは何だろうか？』

そんな事をよく考える。

地球の生物に必要な酸素や水では無く、あくまで人間が“活きる”為に…

そんな事を考えるのは、僕自身が普通の人間と違うからだろうか？
周りにいる大人に聞いても『そんな事を考えなくていい』と言う。

確かにその通りだ。

しかし何故僕はそんな事を考えるのか？

何故大人は『考えなくていい』と言うのだろうか？

それを考えても、また眠れない日が続くだけなのに…

四角い入れ物の中で僕は目覚める。

いつもの様に白衣達が入れ物の戸を開けて迎えに来る。

「六号、時間だ」

いつも通りの機械的な声、見た目は同じ人間なのに何故こいつ等は僕達に対して冷淡なんだ。

腹が立つ！

「聞ってるか」

ムカつく声だ。

「ハイ、聞こえます」

こいつ等には無愛想な位がいい、お前等と同じ様に返事をしてやるよ。

そいつ等と一緒にいた白衣の女一人に連れられて長く続くタイル貼りの床を歩く、何時見ても僕の顔が写るほど綺麗に磨かれた床が延々と続く。

清楚員が潔癖なのか管理者が潔癖なのか知らないが、その床は極端に冷たい。

「伍号と七号はセンターに着いています」

「ハイ」

「今日やる検査は昨日の内に説明されていると思いますが、何処か身体で気になる所はありませんか？ 頭が痛いとか、胸が苦しいとか？」

「大丈夫です」

普段は学習と訓練で一日を過ごすが、今日は能力テストを主に行う、その結果を今後の訓練や実験に反映するらしい。

数分歩いてセンターと呼ばれる場所に着く、そこは既に十五、六人程の白衣が居た。

「ろくちゃん、おはよう」

あまり歳の変わらない女の子が声をかけてきた、その子は僕もよく知る子だ。

「そんなふうには呼ばないで下さい」

「六号って呼ばれるの嫌いでしょ？ だから“ろくちゃん”！」

正直『ろくちゃん』と呼ばれるのは嫌いではない、僕はそう呼ぶこの子を好ましく思っているからだろう。

「みんな揃ったな」

眼鏡の白衣が言った。

それを合図に白衣達が眼鏡を見る。

「これから4回目の測定検査を始める。 尚この検査は前回の検査結果と比較する為に行う、千分の一まで正確に測定してくれ」

まるで堅苦しい演説。

それを聞いて白衣達が持ち場へ散る。

女が「行きましようか」と僕と伍号、七号をセンターの左手側にある扉へ促す。

検査は5項目。

前日に行う身体測定と健康診断。

今日は体力測定、学力検査、適応検査。

体力測定で1時間、その後に休憩兼昼食時間を1時間、学力検査で1時間と適応検査で2時間、計5時間かけて三つの検査を終える。

適応検査以外は何を調べるか解るが、その1項目だけ解らない、ただ高濃度酸素水に満たされたカップセル型の水槽に入るだけの様に見える…

適応検査

ガラス越しにカプセルを眺める女と眼鏡。

「やはり六号は駄目ですね」

「前回との比較は？」

眼鏡の指示に従ってパソコンを操作する白衣が画面にグラフや数字の羅列を表示、そこを眼鏡が横から覗き込む。

「伍号、七号は適応レベルに達しています。六号も上昇傾向ですが、僅かです」

パソコンを操作する白衣が言う。

「これが限界か」

「しかし微動ですが上昇しています」

「我々は十年後の兵士を創っている訳では無い、今使えなければ無意味だ」

「そうですか？ 知能指数は130台ですし、身体能力も成人を凌駕しています。十分実戦投入可能かと？」

「専用兵器が使えなくては話にならん」

白衣は「はぁ…」と自分を納得させる様に返事をする。

眼鏡は「機体の方はどうなっている？」と女に聞く。

「順調です。第1〜第2工程は既に終了しました。あと二十日以内に全工程が終了します」

聞きたい事と違うものを言われ「テストタイプだ！」と眼鏡が声を荒げた。

しかし女はまったく動じず、ただ冷淡に「既に調整済みです」と返す。

「ならすぐにも適応実験を始められる用意を」

「はい」…

名前

適応検査と言うよく解らない検査は体力をかなり消耗する。

おかげで僕はすごく疲れた。

『一体何を調べる検査だ?』と思うが、これまた答えの出ない問いになる。

全ての検査を終えてセンターに戻り検査終了の長々しい眼鏡の演説を聞いている時間は地獄だ。

演説が終わった頃には、もうコロニーの人工太陽が紅く染まり始める時刻を部屋の壁掛け時計が表示していた。

女が「お疲れ様、今日は终いでいいわ、一緒に部屋に戻りましょう」と僕に手を差し出した。

しかし僕はその手を取らない。

「どうしたの? 部屋に戻りたくないの?」

僕は声を発する事なくただ頷く。

「じゃあ少し散歩しようか」

穏やかな笑顔で女がそう言うと、屈んで僕の掌を優しく握ってくれた。

すると女の後ろから「私も行くー!」と大きな声。

「先生ヒドーイ！ 私を置いて何処かいい所に行くつもり！」

僕を『ろくちゃん』と呼ぶ女の子の声だ。

「そんな事しないわよ、“エリカ”も一緒に行きましょう」

それを聞くと女の子は満面の笑みを浮かべて「やったー！」と喜んだ。

しかし今、何故女は伍号を『エリカ』と呼んだのだろうか？

そんな事を考えていると白衣達が七号と呼ばれる男の子を連れてセンターを出て行こうと僕達の前を横切る。

『エリカ』もそれに気付き七号に「どうしたの？ 一緒に散歩行こう」と声をかけた。

だが七号は振り向く事はおろか立ち止まりもせずに「行かない」と呟き、そのまま扉の向こうへ、センターに七号の『行かない』という言葉の冷たい余韻を残して。

背後から眼鏡の声。

「七号はこれから“コア”に“ダイブ”してもらおう」

『コア』とは一体？

眼鏡の言葉を聞き女の目付きが変わる。

「何故私に黙って事を決めるのですか!？」

「今伝えた。それに君は忙しそうに見えたので君の部下へ私が直接指示させてもらったよ、“ダイブ”の観測はこちらで行う、後で君のオフィスに詳細を送るから安心して子供達の面倒を見てくれたまえ」

眼鏡の言葉にはあからさまに嫌味が含まれている。

しかし女は動じる素振りも見せず「わかりました」と返す。

思うに全く動じなかった訳でないだろう、僕等にいらぬ心配をかけたくなかったのだと思う。

女は「ではお先に失礼します」と告げ僕達の手を引いてドアを開けセンターを後にする。

ドアを過ぎると背後で扉が重厚で機械的な音をたて自動で閉まる。

「本当に好きだよなあ」

「やっぱり自分の血を引く子だから可愛いんじゃない？」

「かもなあ、なんかこう見ていると母親みたいだしな」

「保母さんの間違いでしょ、こんな宇宙の果てに居ると頭おかしく成り兼ねないし」

「ニュータイプと噂される天才も、結局はただの人間って事だな」

堅く閉ざされた分厚く重たい扉の向こうから、耳では聴こえない筈の嫌味を『エリカ』は感じた。

女は僕等を基地の屋上に案内してくれた。

屋上からは人工太陽に紅く照らされたコロニー内を一望できる。

『エリカ』は屋上に設けられた長椅子へ駆けて行き端に腰掛ける。

その光景を女は微笑ましそうに見つめてから彼女の隣に腰掛けた。

「どうぞ」と女に促されて僕も長椅子に掛ける。

「ここは私のお気に入りの場所なの、エリカとは何度か来ているけど、君とは初めてよね」

僕は返事をしなかった、だが女の声はまるでそよ風の様に優しい響きでいつまでも聞いていたいと思わせる美しさだった。

「本当に先生はココが好きだよねえ、私も好きだけど」

猫がじゃれる様に『エリカ』が喋る。

「そうだ先生！　ろくちゃんにも名前付けてあげようよ！」

二人は僕の名前を考え始めた。

僕自身は別に『名前』など欲しいと思わないが、二人が考えている姿を見ると、なんだか胸の奥がくすぐったい様な感覚がする。

女は白衣のポケットから白い手帳を取り出して熱心に何かを書き始

める。

『エリカ』がその手帳を覗き込んで「何してるの？」と女に問う。

「名前を考えているのよ」と女は返すが『エリカ』は更に疑問に思
い「変な字、先生の書いてる字読めない」と呟く。

「これは漢字よ、この字の一つ一つに沢山の意味が有るの。例え
ば私の『カオリ』って名前はこう書くの」と女はペンで『華織』と
書く。

「私がお母さんのお腹にいる時にお医者様に『女の子だよ』って教
えられたら、お父さんが『生まれたら着せるんだ』と言って花柄の
着物を買ってきたから『華織』なんですって、おかしいよね」

『華織』はそう言うてはにかむ。

この人の『華織』という名を僕は初めて知った。

『エリカ』は華織の話を聞いてキャハキャハと笑う。

「じゃあ私の名前はどんな意味なの？」

華織は手帳に何かを書き込み僕とエリカに見せた。

「エリカは恵みの華って意味で『恵利華』と書くのよ」

「恵みの華かあゝ、なんか素敵！」

エリカが喜んでいる。

しかし恵みの華か：

戦争の道具として作られた僕達に恵みなど無いのにそれをさらりと言うのか。

だが不思議と華織の言葉は暖かい。

それは華織のエリカに対する思いが決して生半可な慈悲や贖罪の心から来るものでなく、真心からエリカを大事に思っているのだと僕は感じた。

この人はいいい人なのだと思った。

「それじゃあろくちゃんの名前は？」

「そうねえ、君の名前は…」

華織は手帳に漢字を書く、そしてページを一枚破り僕に示した。

僕の名前は…

月面にて（前書き）

宇宙世紀108年。

幾度かの大战を経た時代。

ジオン独立戦争に感化され幾つものスペースコロニーが連邦政府からの独立自治を行いはじめ、地球連邦は過去の様な力を失いつつあり。

その存在は体裁でしかなくなっていた。

月面にて

「……………」

ん？

「…………さ」

この声は…

「ジュディゲル少佐」

その名は…

「少佐聞いていますか？」

俺はまどろみから現実へ呼び戻される。

「すまない少し眠っていたようだ」

「ちゃんと休養はとってますか？ 少佐は気を張りすぎなんです。任務に支障が出る前にしっかり休んで下さいね」

「ハイ、ハイ」

「“ハイ”は一回！」

「ハイ！」

慣れない事務作業で少し疲れていたらしい、珍しく居眠りをしてしまった。

しかし何故こんな昔の事を夢に見る？

この娘と居るとよく『あの頃』と同じ感覚を思い出す。

彼女の血の色の様に限りなく朱い髪がそうさせるのか…

それにしてもこの娘は俺が上官と解っていてこの振る舞いなのか？

まあ俺はそういう形式的な事が嫌いだからいいが、他に知れると問題だな。

「キショウ中尉。俺は堅苦しいのが嫌いだからその振る舞いでもいいが、他の士官が同席している時は遠慮しろよ」

「了解しました。ジュディゲル少佐殿！」

まったく、敬礼すらオママゴトだ。

ドアを“コンコン”とノックする音が部屋に響いた。

「誰だ？」

「フィリア・ニクソン曹長です。入ってもよろしいですか？」

「入れ」

ミーティングルームのドアを開けたのはブロンドのショートヘアが

よく似合う女性だった。

「ご挨拶中に失礼します。ジュディゲル少佐、そろそろよろしいですか？」

フィリアの言葉であの方がいらしたのだと悟った。

「もうそんな時間か。わかった今行く」

「どちらへ？」

「残務処理兼ご挨拶さ、あと必要機材の確認なり俺の仕事は山積しているのな。中尉も今日はもう自室に戻ってかまわんよ」

彼女にそれだけ告げてミーティングルームを後にした。

だが何故か後ろ髪を引かれる思いがする。

俺が彼女ともっと長く居たかったのか、彼女の思念が訴えているのか、俺の力では分からない。

それよりあの方のいるブリッジに向かわねばとリフトグリップを握る。

「随分長いご挨拶でしたね」

「すまない、待たせてしまったかな？」

「いえ、少佐の事ですからもっと早く済むと思っていたので」

小さく頼りない印象のフィリアだが、軍内外の多方面で情報に詳しく、小規模作戦では各隊へのアドバイザー役に回る事が多いらしい。今は艦のオペレーターを担当している。

お互いに初めて組んだのだが、たまにふざける所を省けば優秀な人材だ。

「それにしても一体何をお話していらしたのですか？」

「たわいもない日常会話だよ、まったくよく喋る娘でな、彼女が話に夢中の間に俺は眠っていたらしい」

「あのキショウ中尉がですか？…」

フィリアの声は急にはっきりしなくなる。

「珍しい事なのか？」

「いえ… 珍しいと言えばそうですが…」

「なんだ？」

「少佐の顔は怖いので怯えるかと」

これがそのおふざけだ。

「冗談のつもりだろうが笑えないぞ」

「失礼しました」

「それで本当の所はどうなんだ？」

「私も中尉と同じ隊は2度目ですが…、中尉は何か心を閉ざしている様な印象があります」

「彼女が？」

俺と話をする中尉はまるで俺を父親か何かに見立て、日常に起こった些細な出来事を大冒険の様に話す幼い娘の印象だった。

心を閉ざしているとは感じなかったが…

「少佐は特別なので心を開いているのではないかと？」

「俺が？」

「同じニュータイプじゃないですか」

「それは関係ないと思うぞ」

「“わかりあえる”というやつでは？」

非科学的な事を…

「まるでニュータイプを超能力者の様に思われては困るな、彼女の事をもう少し詳しく知っているか？」

「あの様な女性が好きなのですか！？」

「牢屋に入りたいのか？」

「失礼しました」

反省などしてないくせに。

「去年グラナダで大規模デモ鎮圧の際に緊急召集されたのが私とキショウ中尉で、キショウ中尉はその時はまだ少尉でした」

それは去年の1月3日、一年戦争を主な議題にした討論番組内にて地球至上主義の政治家ロバート・ラースが『月の民は戦争を営利目的に利用した戦犯である』との発言が発端となった事件である。

特にグラナダのデモは激しくTV中継で放送された保安部隊に4機の作業用MSが突進して行く光景はともしヨッキングで、視聴率80%以上と見なかった者はほとんどいないであろう数字を記録した。

デモは2週間続きグラナダ政府が連邦軍にデモ鎮圧の要請を求めたのは発生から1週間後、例のTV中継の翌々日である。

グラナダはジオンを支援していた過去がある為に公国解体後も連邦との繋がりを疎ましく思う政治家が多く、そいつらが連邦の助勢を拒み続けた事で対応が遅れたと推測できる。

「あの事件か。俺はその時は地球にいたからニュースで見た程度だ」

「向こうは過去の大戦の生き残りもいましたから姑息な作戦で戦闘用MSを奪われもして苦戦しました」

「という事はジオンの連中が民衆を味方に付けてのデモだったのか？」

「ごく少数ですが： 一体どんな手を使ったのかはわかりませんが行進に参加した市民だけで三千人以上はいましたし、ほとんどが宇宙産業系労働者なので大戦時の旧式MSも何機か確認されました」

「もはやデモの域を出ているな」

「軍も馬鹿だから私みたいな下っ端ばかり召集して、キショウ中尉が頑張ってくれたから早期に鎮圧出来ました」

「大活躍だった訳か？」

「私より全然若いのに作戦まで立案してくれました」

人は見かけによらないものだ。

「なのに心を閉ざしていると？」

「はい、最初の挨拶の時も形式上の挨拶をそのままただけで、その後も自室で作戦を考えたり自機のメンテとかばかりで、生死をともしした仲と言うには： あまり他の兵士達と会話をしていなかったです」

「なるほどな」

「んでやっぱり少佐はキショウ中尉が気になるのですか？」

「一応しばらく同じ隊として働く訳だからな、心に何か問題がある

のならば隊長として何かしてやらねばならんし」

「それだけですか？」

「お前は俺から何を聞き出したい？」

「いや、少佐は結構モテると噂を…」 前言撤回。

ほとんどふざけた女だ。

「それにしてもまるで迷路だな」

「逃げましたね… 私は慣れました」

複雑な構造の艦内をフィリアに案内されてようやくブリッジの前に辿り着く。

フィリアに案内されなければこんなに早くは着けなかっただろう。

リフトグリップを放してドアの前で自分の軍服の襟を正しブリッジのドアを開ける。

すると連邦軍の制服を着こなした凛々しい後ろ姿が一番に目に入った。

「お待ちせしましたヴォルフ准将」

静かに振り返った彼は18年前から変わらぬ自信と威厳に満ちた優しい笑顔で俺達を迎えた。

「久しぶりだなマーク、フィリアもご苦労だった」

軍曹が一步前に出てすまなそうに軽く頭を下げる。

「申し訳ありません。遅れました」

「気にするな、コイツの事だからと君を迎えに行かせたにすぎん、
本当に見た目は変わっても中身は変わらんなマーク」

「計算外な事態に陥りまして」

「言い訳が下手な所はいい加減直した方がいいぞ、出世に響く」

グレン・ヴォルフ准将、第03独立隊の旗艦“ディープ・ヘルメ”
の艦長兼、隊の最高責任者。

戸籍上の父がいない俺に住居や学校の手配をした育ての親だ。

「出世出来ない人間だからこの隊にいるのでは？」

グレンは笑う。

「そうだな」

サイド3がジオン共和国として連邦政府からの独立を宣言した宇宙
世紀0058年以降。

コロニーの独立自治を求める運動が増え続け連邦政府も経済的圧力
だけでは抑止出来なくなり、連邦はジオン残党狩りを名目にした公
の組織を結成し武力による征圧を行うが、組織は暴走し失敗。

連邦はその失敗から公の実行を諦め、影の組織での実行を開始する。
その組織が独立隊“ディープ”である。

ディープの対象となるのは連邦軍の駐留を拒む独自の戦力を持った
総てのコロニー。

コロニーに資源供給する船に所属不明の兵器で襲撃し供給を断つ。
いわば海賊だ。

連邦の支援無くしてコロニーの維持が出来ない状況を作り上げる事
が目的。そのためディープで使用される兵器は連邦軍に存在しない
企業の実験兵器が主。

そして本来艦隊指揮をする将官がたった一隻の艦長に過ぎない点も
ディープの特徴である。

これは対象のコロニーの資源供給を断つ為に必要と艦長が判断した
独自作戦を連邦軍上層部の評決無く実行出来るという理に適った特
徴であるが…

それは作戦により連邦政府や軍に不利益が生じた場合、責任の総て
を艦長と隊の全員に求める為である。

ようするに連邦による海賊行為がバレて責任追及されても公には存
在しない組織なので当事者である俺達を秘密裏に処刑して知らぬ存
ぜぬを貫く事が出来るといふ腐りきった連邦の考え付きそうなシス
テムだ。

その為ディープに選ばれる者は連邦軍の体制に相応しくない連中ばかりで、この隊は連邦軍のゴミ箱に過ぎない。

グレンも連邦軍の体制に相応しくない人物でディープに移る前まで大佐だった。

グレンは地球生まれの連邦軍人にしては珍しい実力主義者で優秀な人材ならスペースノイドでも側に置きだがる変わり者。

本来低い階級しか与えられないジオン出身者達がグレンの下で着実に評価せざるを得ない実績を重ね続けたので軍上層部は彼を問題視せざるを得なくなり、グレン・ヴォルフ大佐は形式上准将に昇進させられ“ゴミ箱”入りした。

「悪かったねフィリア君、持ち場に戻ってくれ」

「はい」

快活よく返事をするフィリアはオペレーターの席に向かい、椅子に積んであったマニュアルを片手に持って機器の使い勝手の確認を始めた。

まだ新鋭艦に慣れていないのに俺の迎えという使い走りをされた訳か。

相変わらず人使いが荒い。

気遣いを忘れない所はグレンの魅力だが、グレンが部下に尊敬され慕われる所も“ゴミ箱”入りした理由と推測出来る。

いわゆる嫉妬だな。

「この艦には慣れそうかマーク？」

グレンはブリッジの窓の外に視線を戻す。

その先には無重力のドック内でボードPCを片手に艦の最終チェックを行っているメカニック達の姿が見える。

「ご命令ならば慣れます」

ブリッジはグレンの他に数人のクルー達。

ナビゲータのカイト・クライシ准尉は同じナビゲータのヘレン・バツク少尉に通信機やレーダーの使い方をレクチャー中。

「不器用だなお前は、いつか一緒に仕事をして思ったが、まさかこんな形になるとはな」

「仕方ありません、上の連中からすればニュータイプは戦争の道具に過ぎないです」

「……………」

少し皮肉が過ぎたかな。

グレンは少しだけこちらに体を向ける。

見ると彼の横顔は微かに愁いを帯びたものだった。

「あの娘もだな」

「キショウ中尉ですか？」

少し背伸びをする様にグレンは顔を上げてブリッジの天井に視線を移す。

「ああ、彼女の事はお前に任せるよ」

「どういう意味です？」

すぐに答えずグレンは俺の横を通り過ぎてブリッジのドアの前で俺の方へ向き直し重たげな口を開いた。

「そのうち話す…」

それだけ呟くとグレンはドアを開けて通路のリフトグリップを握る。

彼の背中には『着いて来い』という無言の言葉を発している様に感じたので、俺もブリッジを出てリフトグリップを握った。

グレンはすれ違うメカニックマン達に挨拶をする以外は艦長室に着くまで一言も口を開かなかった。

お互い無言のまま部屋に入る。

部屋の内装は艦長室という名に似合わず質素で、応接用の二人掛けのソファ―二脚と黒塗りのテーブルが無ければ独房となんら変わり

はない。

むしろ彼の境遇を考えると独房かも知れないとも思ってしまう。

明かりを点けながらグレンはようやく口を開く。

「そこに掛けてくれ」

促されて俺はソファーに腰掛けながらデスクの引き出しからファイルを取り出すグレンを伺う。

「お前を呼び出した理由はコレだ」とそのファイルをテーブルに置きグレンは俺の向かい側のソファーに身を委ねる。

「新型の極秘ファイルだったならわざわざブリッジに呼び出す必要はないのでは？」

「私の呼び出しを散々すっぱかすからそうなる」

「ジュニアハイスクール時代の事をまだ根に持ちますか」

「ハイスクールもだろ」

「そうでした」

18年前のアジール・コロニー開放作戦後、リボー・コロニーに移り戦災孤児施設での生活を始めた俺をグレンは養子に迎えようと度々訪ねてきたのだが、俺は彼から逃げる様に面会日は必ず姿をくらし続けた。

確かにグレンと彼の妻キャスリーンには返し切れないほどの恩がある。

しかし当時の俺は言葉に出来なかったが、幼心に俺みたいな人間がグレンと同じ姓を名乗るのはおこがましく、彼の出世の道を断つ事になるので申し訳ないと思ったからだろう。

それが“ジュディゲル”と俺が名乗ってきた理由だ。

今となってはそんな気遣いは無意味だった訳だがな。

「そんな事より中を見たらどうだ、中々面白いぞ」

含みを持ったグレンの言葉に従ってファイルを開いた。

最初に目に入ったのは“ZERO・Project”という表紙。

しかしページをめくっても新型MSのスペック欄は空白ばかりでこのファイルは詳細の意味をなしていない。

「トップシークレットってやつですか」

「ああ、今回ののは日本の宇宙航空科学事業団が開発したものらしいのだがな、その事業団の内実はサナリイやコロニー公社に技術提供しているスーパーエンジニア集団みたいだぞ」

おかしい事を言う人だ。

でもグレンのこういう豪快なネーミングセンスは好きだ。

「また変な言葉を当てますね」

「ハハ、売り込みの奴がそのファイルを私に渡すなり『詳細は日本へいらした時に続けてお教えいたします』ときたもんだ、よほどの自信があると見た」

グレンは笑う。

彼の笑顔には他人の心を明るい気持ちに出来る特別なものをいつも感じる。

「なるほど、だからスーパーエンジニア」

「一応私は説明を受けた、試作機の仕様はニュータイプ用だ」

「自分の機体になるのですから、そうでしょうね」

「それともう一つ、これは私の独断だが、キショウ中尉にも試作機に乗ってもらう」

「やはり彼女の腕はそれ程ですか」

「……」

俺の素朴な質問に彼は黙り込む：

部屋が沈黙で充ちていく：

それは時が止まる様な永遠に感じられた。

「… 本当に何も知らないのだな…」

どういう意味だ？

確かに俺はあの娘の事を何も知らない。

だから彼女とMS隊長として話した。

………

いや違う。

彼女に何か懐かしいものを感じたからかも知れない。

彼女の血の様に朱い髪に…

静かに記憶を探る俺を見てグレンが言う。

「彼女はお前と同じだ」…

コーヒーブレイク

「冷めてますよ」

唐突に放たれた黒服の呆れ気味な口調に気づき男はコーヒーカップに視線を移す。

さっきまで熱い湯気を上へ昇らせていた黒い液体はすでに飲むのに最適な温度を失っていた。

「ああ、気が付かなかった」

「ずいぶんと御熱心でしたね」

「そうか？ それにしても彼女は中々研究熱心のような。想像以上の内容でコーヒーに手をつける事も忘れて読んでしまったよ」

男は湯気を失ったカップを手にとり冷めきったコーヒーを口に近付ける。

「大佐がお褒めになるならよほどですね」

「だから大佐はやめろ。それとあまりごまをするな」

本にしおりを挟んでテーブルに置き冷めたコーヒーを口にする。

「ぬるいな」

「でしょうね、5分以上たっていますから」

「そんなに読んでいたか？」

「御自分で本のページを確認してみてくださいよ」

「わかったわかった」

確かにしおりを挟んだ所を見るとやや読み進んでいるのが伺える。

男は彼女の作品に引き込まれていた。

カウンターの奥では熊髭が業務用の冷蔵庫から何かを取り出している。

しばらくして丸トレイに何かを乗せてやってきた。

「うちのコーヒーは冷めても美味しいですよ。これはサービスです」

トレイに乗ったそれは見たところチーズタルトに見える。

「なんだそれは？」

「これがピザに見えますか？」

「お前が作ったのか！？」

「他にいないでしょう」と熊髭は自慢気に笑う。

それを観て黒服は笑いを必死で堪える。

40 越えて髭面のデカイ図体をしたオヤジがケーキの類をエプロン姿で作っているのを想像すれば無理もない。

熊髭はタルトを一つテーブルに置く。

「新しいメニューにと思いましてね、知り合いから教えてもらったのですが中々の味で、よろしかったらどうぞ」

しかしテーブルに置かれたのは一人前しかない。

黒服がそこに「俺の分は？」と噛み付く。

それに熊髭は冷たく「近くのケーキ屋で買ってくればいい」と返す。

「大佐ばかり優遇して、差別だ差別！」

「読書家特権！」

互いを責める訳でもないただのふざけた馴れ合いのを始める二人であつた。

「それじゃ読書家じゃない俺はタバコでも吹かしているよ」

黒服は席を立ち店の奥のテーブルへ移って上着の内ポケットからタバコの箱と古びたZipproを取り出す。

熊髭は男に話かける。

「もしやその本はあの古本屋の娘が書いたものですか？」

「よくわかったな、知り合いか？」

「まあ彼女にいろいろ聞かれました」

「何をだ？」

熊髭はタルトの乗った皿の隣に紙ナプキンを敷いて上にフォークを置くと、丸トレイを胸に抱き込む様に持って話を続けた。

「やれ戦艦の中はとか作業用のMSとどう違うのかと」

「なるほど… アドバイザーをした訳か」

すると熊髭は大事な事に思い当たり慌てて「もちろん機密事項は…」と言葉を噴き出したが、男は彼が信用の置ける人物だと理解しているので「わかってる、お前の事だ」と言葉を最後まで聞かずに返し熊髭にホッと息をつかせた。

「出過ぎた真似をしましたかね？」

いかにもはにかんだ様に熊髭は右の人差し指で頭をかく。

「そんな事ないさ、元軍人がアドバイザーなら良いものが書けたと彼女は喜んだろ」

「ええ、お礼にとこのチーズタルトのレシピを教わりました」

「そうなのか、それを聞くと美味そうに見えてきた」

男は笑う。

「レシピも良いですがコックの腕も良いですよ」と熊髭の自己主張が返ってくる。

「それも知っている。ではお前はもうこれを読んだのか？」

「一応」

「感想は？」

「そこを聞いては駄目でしょう」

熊髭は笑う。

「確かに野暮だな」

だが突如熊髭が熱弁を振るいだす。

「しかし中々意味深な言葉が続く中で物語が展開し、その先には激しい戦闘と根の深い悲しみに涙し、最後は愛に……！」

熊髭は結局自分の感想を大半語っていた。

彼が気付いた時にはもうすでに遅く「今のは聞かなかった事にして下さい！」と口にはするが、この近さで言葉を聞き逃す方が難しい。

熊髭は激しく己を恥じている。

男は熊髭の素直な反応があまりに可笑しく大声で笑ってしまった。

「ハッハッハッ、結局自分から話しているじゃないか」

「何とも自分が間抜けです」

「だな。だが私はお前のそういう素直なところ嫌いじゃないぞ」

「情けないですが、そう言っていただけと有り難いです」

男はテーブルに置かれたフォークを取る。

「なるほどな、確かに意味深な言葉が多い。だが元軍人のアドバイスがここまで熱く語るのだから余程の傑作だろう」

男はタルトを一口食す。

タルトのサクサクとした生地 of 食感が口の中で響く。

次にほど好く甘酸っぱいレアチーズの味。

最後にさっぱりとしたレモンの風味が口の中いっぱいに広がり、あまりの美味さに笑顔がこぼれた。

「うん、確かに」

「でしょう!」

「お前が作ったとは思えない味だ、甘すぎないからコーヒーにも合う」

一服を済ました黒服が「私にも一口」と言葉を挟んだ。

「だから言っただろ」

「いいではないか、俺の護衛をしてくれている事だし」

「…………… 本当にお優しいですねえ。大佐のお言葉に感謝しろ」

『冗談で言っただけだ』と男は微笑む。

熊髭はカウンターの向こうに戻りあらかじめ用意されていたタルトを男の向かい側に置く。

「食いたかったら座れ」

「はいはい」

黒服は男の向かいの席に戻る。

「素直じゃないな」

「俺がタダで食わすと思うか？」

熊髭が不敵な笑みを浮かべる。

「3クールでいいか？」

「冗談だよ」

「知っているよ、お前はそういう人間だから言ってみただけだ」

仲の良い二人だ。

取り留めのない会話が続く。

背後に死の恐怖が迫る戦場に長く身を置く男からすれば、こんな取り留めのない日常でも生きる喜びになったであろう。

目の前で下らない話をする同僚と元同僚、そしてこのコロニーを生活の地にして子を養う人々の笑顔こそが彼の疲弊しきった精神を癒す薬なのだ。

黒服がタルトを美味そうに頬張っている。

気が付くと飲みかけだった男のコーヒーも新しいものに取り替えられていた。

やはり『ぬるい』という言葉聞いて気を使わせてしまったようだ。

男はタルトをもう一口。

しつこくない甘味と酸味が心地好い。

コーヒーを一口。

ビターな味と薫りはチーズタルトの余韻を引き立てる。

男は再び本を取り、しおりを挟んだページを開く…

禁じられた者達（前書き）

マーク・ジュディゲル…

29歳

地球連邦軍所属の軍人で階級は少佐。

名は偽名。

遺伝子操作されて生まれた人間。

しかし元々のニュータイプ能力が乏しかったらしく自ら薬物強化を施して後遺症で白髪になる。

性格は温厚だが皮肉屋で一度戦闘になると冷血な一面も垣間見えるが、それは遺伝子操作による部分が影響している模様。

戦闘スタイルや機体色から“黒い鷹”の異名を持つ。

養父であり上司であるグレンを尊敬してはいるが時に疎ましくも思っている。

白髪ではあるが美しい長髪で容姿端麗。かなりモテるが恋愛に関心が無い模様。

作品の主人公。

禁じられた者達

俺と同じ…

「強化人間という事ですか？」

「もっと悪い」

もっと悪い…

その言葉で思い当たるのはあと一つ。

「では… “エンキト” だと」

グレンは硬い表情のまま頷く。

エンキト。

遺伝子レベルで身体能力や知能指数を強化した人間。

戦力の乏しいアクシズが優秀な戦士を確保する為にクローニング技術と並行して研究をしていた技術だ。

しかし疑問が残る。

「連邦にそんな技術が有るとは考え難いのですが？」

「それがアジール・コロニーを攻撃した本当の理由だ」

「…!？」

驚愕で言葉が詰まる。

「彼女は戸籍上22歳ではあるが実際はまだ17歳の子供にすぎない」

「作戦後に得た技術を使って造られた…」

「そういう事だ」

「チッ！」

心から溢れる憎しみが止まらない。

どんなに時がたってもオールドタイプは力への欲を捨て切れないのか！

同じ過ちを幾度となく繰り返して…

クソッ！

「だからお前に彼女の事は任せる」

グレンへ返事する為己の感情を覆い隠す。

「解りました」

「同じ境遇のお前なら彼女の心のケアも出来るだろう」

哀しみを含んだ言葉であったが同時に俺が成すべき使命の提示と俺への信頼から出た言葉なのだと感じた。

グレンは部屋に漂う暗い空気を察して話題を変える。

「話が逸れてしまったな。それでもう一つ頼みというかこれは命令なのだが」「何でしょう?」

「新型受け取りの際お前はキショウ中尉と共にMSで降下して現地に向かってもらう」

「シャトルでなくMSですか?」

「ああ、向こうがお前達のMSのチューニングを見たがっついてな。今お前とキショウ中尉が乗っているMSと引き換えに新型を受け取る事になった」

「命令なら従いますが今の機体も一応は機密では?」

「上からの指示だ。“独立”なんて名前は付いているが上から命令が出れば従うしかない、それに代わりと言っては何だが今より優れた機体に取り換えるのだから損は無いさ」

「今のが最低ですがね」

「また愚痴か。お前が特別だからだよ」

フォローの様な言葉だがグレンはそれに笑いを含めた言いようだった。

「お褒めの言葉として受け取ります」

「あれはお前専用に組まれた機体らしいからそう言うな」

「確かに遠距離狙撃は得意ですが格闘戦が苦手な訳では」

「そのお得意の遠距離狙撃に合わせたのだから格闘に向かなくても仕方あるまい」

「アナハイムで試作した最新の小型ジェネレータと大推力を生む熱核ロケットと遠距離狙撃をサポートするA Iの実験機体……」

「まさに特化しているな」

品の良いグレンの笑いが部屋に響く。

「だがあんな機体役に立ちますか？ 加速Gは殺人レベルですし、並の人間に扱える機体の方が……」

俺の皮肉を最後まで聞かずにグレンが口を出す。

「私はお前のクレーム処理係ではないぞ。この隊が組まれる前からお前の戦績は聞いていたし『マークなら』と思って実験機をお前に回していたのも私だ」

少し驚いた。

ずいぶんと高く評価されたものだ。

まあ普通じゃない俺に毎度危ない仕事が回される事は仕方ないとい

う諦めもあったし慣れていたが、まさか危ない仕事を回す張本人の一人が俺の養父で、しかも理由が『信頼』だ。

見方を変えれば俺を超多忙にして軍を除隊させる気でもあったのかもしれないが、何故か嫌な気はしない。

親心というやつか。

「すみません、また悪い癖が出ました」

「お前もいい歳になったのだから直せ、上官からの命令だ」

お叱りなのだろうが親しみの有る言い回しだった。

「前から言っているだろう。難しい事を任された時はそれだけ…」

「自分が評価されていると思って勤めろ… ですね」

今度は俺がグレンの言葉を最後まで聞かずに口を挟んだ。

この言葉はグレンのお叱りの定番だったから覚えてしまった。

「相変わらずなのはお互い様ですね」

何だが可笑しいな。

こうして話すのは3年ぶりだろうか。

俺が連邦軍を志望した時グレンは激しく反対したが結局最後は俺の決意に折れて応援してくれた。

以降はグレンお得意の根回しで仕事が忙しく、たまに会食に行く程度で疎遠になっていた。

「まったく… そうだ！ いい歳ついでに聞くがお前恋人はいないのか？」

突然何を閃いたかと思えば女の話だった。

俺は結婚する気が無いというのに…

こういうのは適当にあしらう。

「明日は出港なのでそろそろ…」

席を立とうとするとやはりグレンは俺を呼びとめる。

「もう3人も見合い写真を送ったのに返答が無いのはどういう事だ？」

まるで尋問の様だ。

「自分はやはり独り身の方が…」

「見合いが嫌ならフィリアはどうだ？ 彼女は優秀だし美人じゃないか、お前に興味も有るようだし歳もそう離れていまい。職場恋愛でも構わんから」

要望の様な言葉が続く。

俺の感想を言えば『知るかよ』の一言だ、しかしそれを口に出来るほど幼稚な子供ではない。

ふと言い訳の様に出了た言葉が「今は仕事が忙しく…」だったが「こういう時ばかり忙しいのだなお前は」とすんなりグレンに言い訳とバレた。

「マーク： お前も今年で29だ。女性士官から人気が有るとよく噂を聞くがまったく色気のある情報を耳にしないのはどういう事だ？ 私は早くお前に家庭の幸せを知って欲しいのだよ」

俺の事を思つての言葉と理解出来るが、それに応える事は出来ない。

それにしても吹き出す様にそんな言葉をポンポンと：

こんな事をグレンに吹き込んだのはきつとフィリアだな。

グレンは一つの事に思い至りゆっくりとそれを確かめる様に口にする。

「やはり身体を気にしているのか…」

俺は遺伝子操作された人間な上に未熟なニュータイプ能力を補う為の薬物常用で既に身体はボロボロだ。

白髪だけならまだしも男としての機能も無くなっていると思う。

そういう色っぽい関係になつてもお互いに辛いだけ。

グレンが思い詰めた表情で告げる。

「過去に囚われるのは辞めろ。お前一人の問題じゃない自分をもつ

と大事にしろ」

奴が生きている限り俺の幸福なんて無い。

絶対にあいつを…

「俺一人の問題ではありませんが、俺の問題な事に変わりないです」

俺は席を立つ。

「マーク…」

グレンの口から悲しい響きの俺の名がこぼれた。

奴を殺せるのは生き残りの俺一人。

幸福なんて二の次でいい。

俺はドアへ向かって歩きながら呟く。

「キショウ中尉の事はお任せ下さい」

言いながらドアの前でグレンの方を向くと彼はソファから立ち上がり両手をズボンのポケットに突っ込みこっちを見る。

「彼女の背中とあの朱い髪を見ると少年時代のお前を思い出すよ」

「グレンも嫌味がお上手だ」

俺はそれではとグレンに挨拶をし部屋を出ようとする。

「マーク！」

ドアを開けようとするするとグレンに呼び止められた。

「まだ何か？」

ゆっくりと間を持たせグレンが口を開く。

「お前……」

そこまで言うとうとグレンの言葉は詰まる。

「……笑うのが上手くなったな」

「おかげさまで」

「それだけだ」

「……？ では明日」

彼へ敬礼して部屋を出た。

グレンは自分のデスクへ歩き黒革張りの立派な椅子に腰を下ろし背もたれに身体を押し付ける。

「マーク…… 彼女はお前にとって生易しいものでない…… エンキトと呼ぶより……」

独房の様な部屋に一人残されたグレンは、かける対象を失った言葉を呟き続ける。

「キメラだ」
：

もう一人

同じ頃。

貴族の様な金の刺繍で装飾された軍服を纏う男が眼前に広がる青い星を眺め再会の時を待っている。

男はため息の様に呟く。

「そろそろか…」

男の隣には身の丈190cmはある長身で黒い短髪の軍人が控える。

「内通者の話では新造艦の完成が遅れたとの事です殿下」

「そのようだな」

二人は超大型スクリーンに投影された母なる星を眺めて何を思っているのだろうか。

部屋は中世ヨーロッパの宮殿を模した美しい装飾が施され、床と壁は大理石の様な白く美しいマーブル模様、部屋の広さから小規模なブリーフィングルームかパーティー会場のようだ。

殿下と呼ばれた男は呟く。

「10年だ」

「はっ？」

「いや正確には13年か、連邦の黒い鷹…」

「ああ… 地球では反政府テロで御活躍だそうですね」

「腕をあげたよ、本当に待ち遠しい」

「そうでございますね」

殿下は肩の辺りで緩く纏めた朱く長い髪を翻しドアの方へ向かう。

それを見た長身の軍人は右手に持っていたリモコンでスクリーンを壁と同様のマーブル模様に取り替え、歩き出した殿下を追い抜きドアを開ける。

二人は格納庫へ向かう。

庫内では壁際に立たされたMSが3機、整備の為に仰向けに寝かされた機体が1機。

二人は作業員が使う高所通路キャットウォークからそのMS達を見下ろした。

「まずはお前がファーストコンタクトをとれリューク」

「はい」

「その間私の隊は周回軌道上で根回し済みの人工衛星に取り付き衛星の望遠鏡をハッキングしている。そして奴らの降下まで待ち降下後の奴らの目的地を特定、その後お前達と合流し降下だ」

「この作戦で行けますでしょうか？」

「愚問だな。地球の人工衛星のほとんどは既に骨董品だ」

「しかし連邦軍の船に見付かる危険もあります」

「平和ボケで御役所仕事の連邦だ。パトロールの目は穴だらけで意味をなしていない、戦艦ならまだしもモビルスーツ3機ならその穴をすり抜ける。見付かったとしてもデブリと思うさ」

「たいしたお方だ」

リユークの口から感嘆の言葉が漏れる。

部下の言葉を軽くあしらう様に笑う。

「何を言うと思えば… どのみち危険である事は承知の作戦だ。用心は怠るな」

「ハッ！」

軍隊式で快活の良い部下の了解。

殿下は壁際の左端に立つ白いMSを見る。

機体のシルエットは連邦製MSの様な直線的なデザインでシャープな印象を与えるが、ヘッドは一年戦争でジオンが使ったゲルググに似ている。

ランドセルには後方へV字に伸びる角型の4本の大型バインダーが装備されているが、それはバインダーではなくメガ粒子砲を搭載した4機の大型ファンネル（無線誘導兵器）でオールレンジ攻撃を可

能にしている。

そのファンネルの間から頭部の後ろへ垂直に伸びた棒状の物は試作された超大出力の巨大ビームサーベル“フランベルジュ”

ランドセルから供給されるエネルギーを直接充填する為に柄から直線上に伸びたソケットが存在し、その部分は文字通りランドセルに刺さる様になっている。

フランベルジュはビームサーベルの最大出力を求めて開発されたもので刃を発生させる時間は30秒程しかないのに対し再使用には140秒の充填が必要であるが、切れ味はシリンダー型コロニーのミラーを簡単に切断出来ると言えば想像しやすいだろう。発生させるビームの形状は片刃の包丁に近いものだ。

他に両腕には射速性能の高いビームカノンが内蔵されている。

携行武器は一般のアナハイム製ビームライフルとビームランチャー、その他ブッホコンツェルン試作のブランドマーカーと呼ばれる攻守一体小型ビームシールド等、汎用機と専用機の中間的な機体である。

「このゼノで遊んでやる」

「ヴァロール殿下専用のカスタム機ですね」

「付け焼き刃だがこれなら十分だ」

「今時ファンネル搭載機で相手しなければ落とせない敵機と考えると“王牙”はそれ程の機体ですか？」

「あれには“コア”が積まれているからな、それを使われたら20機はMSが堕ちる」

「“コア”ですか…」

「“オリジナル”と言った方が正確かな」

その言葉を聞いてリユークはようやく理解する。

「実在したのですか!？」

「ああ、得体の知れない物の代表的な存在だな、あれが現在のサイ
コミュニケーション（脳波制御装置）の原形さ」

「都市伝説の類だと思っていました」

「だが実際に存在する。旧ジオンの時代からの最高機密であったが、
まだ技術的な進歩の拙い時点から人体実験も行ってしまったので幾
人も犠牲になった、おかげで公国の幹部でも一部しか知らないハズ
の最高機密も戦争が始まった時点では軍の下士官すら噂話をしてい
たからな」

皮肉含みに笑う殿下の顔はやはり彼に似ている。

「それより俺の機体に乗る気はないか？」

「はっ…!?」

挨拶

翌日。

出航前の号令の為、独立隊の主要メンバーがブリッジに集合した。

集まった総員は30人は居るであろう、そのほとんどはブリッジクルーとMS隊で残り数名は各要員の士長のみだが、30人ものメンバーが入る広いブリッジは近代の宇宙戦艦では珍しい。

しかし流石にこれだけの人数が揃うと狭く感じる。

「ブリッジクルーとMS隊、及び各士長の皆、集まってくれて感謝する」

ブリッジの正面窓を背にいかにも軍人という感じでグレンが背筋を真っ直ぐにして立ち挨拶を始めた。

「まずは出航が遅れた件を代表の私から謝らせてもらう、まあ予想せぬデモの余波でアナハイムの社員側がストライキを起こしたのが理由の一つではあるが、全く予想出来ない事態ではなかったので私がおかしらの対策を練るべきであった。おかげで数日基地内待機という暇を持て余した事だろう、申し訳ない」

別に誰も気にしてはいないがこれがグレンのやり方だ。

待機命令も基地内って制約は付いたが休暇みたいなもので遊び好きなメンツを除けば皆有意義に活用出来た様だし。

「本艦の作戦目的をあらためて説明する」

ここに居るほとんどがこの隊を“ゴミ箱”と認識してはいたが正式には“独立隊”であるが故に体裁的な説明をするグレン。そして既に二つ有る独立隊を新たに結成した理由も述べた。

「今年5月18日に第01独立隊が所属不明のMS隊と交戦して壊滅した。奇跡的に02独立隊に回収された2名のMSパイロットの証言によるとサイド2のレジーヌコロニー、旧アイランド・ブレイドと言えは解り安いだろうか、その警戒任務中でデブリ群に潜伏していた艦に突如6機の正体不明MSに急襲されたようだ」

アイランド・ブレイドは過去の一年戦争で被害を受け後のコロニー再生計画で移送中にジオン残党が計画した星の屑作戦で地球へのコロニー落として利用された。

しかし実際に地球に落とされたのは共に移送されていたもう一つのアイランド・イーズであった為にブレイドはしばらく行方不明であった。

再び発見されてからは新規コロニー“レジーヌ”として改修されてサイド2に移りレジーヌコロニー自治政府の意向で宇宙難民を多く受け入れるていた。

「それで我々は母艦を失い任務を果たせなくなった01隊に代わりレジーヌコロニーの警戒任務に付く」

ここまではクルーのほとんどが知る俺達の仕事。

だが第01独立隊が生き残ったメンバーを入れて再編される事は無

いだろう、相手が誰か知らないが連邦のゴミを見事処分してくれた訳だから、運良く生き残った奴らの身は恐らく地球で幽閉って所だろうな。

問題はここからだ。

俺達の目的はレジーヌコロニーの警戒任務となっている訳だが出航後の進路を知るのは恐らく副司令を兼ねている俺だけ。

「更に新型MSの実動試験も行うのだが、そのMSはトップシークレットの為に我々が現地の地球まで受取に行く、と言っても本艦は大気圏での運用は想定されていないのでMSパイロットのマーク・ジュディゲル少佐とユリ・キシヨウ中尉の二人で地球に降りてもらい本艦は周回軌道上で二人の帰還を待つ」

受取を終えた俺達をシャトルが大気圏離脱用ブースターで周回軌道まで上げてディープ・ヘルメに拾わせる寸法か。

ブースターともなれば軌道が1度でも外れたら宇宙漂流って笑えない話しだな。

「私からは以上だ。ジュディゲル少佐、副司令として君からも皆に何か一言」

群集の前列に立っていた俺はグレンに促されて前に歩み出し彼の横に立つ。

正直こういうのが苦手だ。

それを知っていてやらせるグレンも鬼畜だと思うよ。

「第03独立隊副司令兼MS部隊隊長のマーク・ジュディゲル少佐だ。皆知っているだろうがこの隊はある種特殊だ。故にこれから超過酷な任務をこなす事になるだろう」

我ながらいい加減な語りだ。

「まず俺達は地球へ新型MSの受取に向かうがその後はレジーヌへ進路をとる。恐らくレジーヌ側の武装勢力と交戦する事はある意味必然に等しい、01隊が壊滅した事実で向こうも相当手強いと想像できる。いつ何時俺達が01隊の様になるかも知れん事を覚悟してくれ、以上！」

こんなもんかな。

俺の肩にポンとグレンの手が置かれる。

「ではご苦勞、持ち場に就いてくれ」

グレンの敬礼に合わせてブリッジに居た皆が敬礼した後、各々の持ち場に向かう。

「私もこれで失礼します」

「ご苦勞」

皆が持ち場に向かうのを見送ってから改めてグレンに敬礼しブリッジを出る。

「ジュディゲル隊長！」

リフトグリップを握ろうとすると背後から呼び止める声がした。

「何故新型が自分ではなくあの小娘に！」

俺がブリッジから出るのを待っていたであろうこの青年はまるで殴りかかるかの勢いで言葉を言い放つ。

青年は以前北極で別の試作MSのテストパイロットと一緒に勤めたロビン・パーソン中尉であった。

彼は自身の優れたニュータイプの資質に一種のプライドを持っているが、そのプライドが過剰過ぎ独断先行する悪い習性で部隊を危険にさらす事がしばしば。

グレンが試作機のテストパイロットとして引き抜く前までは“噬ませ犬”と揶揄されてきた問題児であった。

まあ確かに彼のパイロットとしての適性は優れているが、23歳という若さと過剰なプライドが彼の短所だ。

グレンの事だからそういう奴も使い方って認識で引き抜いたのだろう。

恐らくブリッジで新型機の受取を任じられたのがキショウ中尉と聞いて彼女がパイロットに選ばれたと察したようだ。

それで号令中グレンに意見したい気持ちをじっと堪えていた訳か。

「俺に八つ当たりしても結果は変わらん。パイロットを決めたのは准将だ」

「じゃあ自分が外された理由を！」

このような手合いにはきつい言葉を浴びせた方が有効だな。

「知らん！ 頭を冷やせ」

我ながら突き放す様に言ったが、この青年に有効に働くか分からなかった。

しかし慰めの言葉を求める様なタイプでもないので彼を置いて格納庫に向かう。

途中フィリアの艦内アナウンスが「総員に告げます。艦の拘束を解除しますのでショックに備えて下さい」と流れる。

間もなくガクンと船が左右に揺れて危うくりフトグリップを離してしまいそうになるが右腕に力を入れて堪えた。

エアロックに入るが戦闘配備命令が出てないので格納庫内は空気が入っていて素通り出来た。

格納庫へ出る為の分厚いハッチを開けて直ぐに整備士長の名を呼ぶ。

「おーい、アーノルド！」

「ジュディゲルか？ 今お前を見てるからこっちに来い」

ハッチを出てすぐ左側に立つ黒いMSのコクピットからアーノルドの声が聞こえたので足で床を蹴り慣性で自身の身体をそのコクピッ

トまで飛翔させる。

「なんでコクピットなんか見てるんだ？」

開いていたコクピットハッチに手をかけて身体を制止させてから中を覗き込むとアーノルドは右のアーム・レイカー（球状操縦桿）をバラしていた。

「次の機体もコレなんだとき、だからお前の癖を記録してる」

「アーム・レイカー分解しちゃ出撃出来ないだろ」

「俺なら3分もかからないで組み立てられるから問題無い」
彼はアーノルド・シュワイガー曹長。

元々は民間企業の人間であったが軍で機械工学に優れた人材が不足した時に教官として迎えられたのだが、職人気質で一見無愛想な彼は上からよく誤解される事がありグレンが引き抜いた。

「あそ。新型機もアーム・レイカーか」

「新型の事を聞きに来たなら諦めな。俺は准将が命令した機体の記録作業しかやってない」

「はいはい。なんか手伝う事ないか？」

「無い。今の仕事はこれ。もう1機はハンナが見てくれてる」

「もう1機？」

「キシヨウ中尉のだろ」

「ああ、そうだな。じゃあ彼女の機体の記録が見たいのだが」

アーノルドは一呼吸置いて叫ぶ。

「おいハンナ！ キシヨウ中尉の機体整備記録出せ！」

うるさい声だ。

この至近距離では鼓膜が破れる。

「そんな大きい声出さなくても聞こえているわよ」

左斜め向かいに立つ派手なオレンジのカラーリングが施されたMSのコクピットが開き、中から褐色の肌の美女が姿を現す。

「あんだねえ、毎度毎度言ってるでしょ、うるさいって」

少し不機嫌気味な彼女がハンナ・シュワイガー、アーノルドの妻だ。

彼女も旦那と同じメカのプロ。

アーノルドよりか愛想よいが基本似た者夫婦ってやつかな。

一隻の戦艦の中で夫婦が出来る事はまあ有る話だが、元々夫婦の者二人が船員に選ばれる事は軍では非常に珍しい。

その珍しい現象を導いたのはアーノルドがこの艦の整備士長をグレンから任じられた時に妻のハンナが『なら私も一緒に』とわざわざ

グレンの自宅をたずねて直談判したからだとか。

彼女は元々軍でMSメカニックのアドバイザーをやっていた。

その時にアーノルドと知り合って恋に落ちたらしい。

だがハンナの美しさを考えればもっと階級の高い士官と結婚していてもおかしくはない、にもかかわらずあの口を開けば機械の事しか出ないアーノルドを選ぶとは世の中わからないものだ。

おまけにハンナはアーノルドにゾッコンで独立隊の実態を知ったハンナは夫を一人行かせる事が出来ないとの事でグレンに殴り込みだ。

そこだけ聞くと本当にお熱い二人だが仕事中の二人は一見そうは見えない。

にしても来年40になると思えない程ハンナは美しい、今だに若い士官からも凄い人気だし。

アーノルドも男前で悪い人間でもないが、性格に難が有るので尚更二人の結婚は疑問ばかりだ。

その疑問も含めて結婚した当時はハンナを狙っていた男達にアーノルドもさぞ怨まれた事だろう。

「こっちはセンサーチェックの為に火が入ってるんだから、音感センサーで外の音は丸聞こえなの」

毎度毎度この二人の会話は怒気を帯びていて聞いている側は氣を使うよ。

「忙しい所すみません。その派手なのがキシヨウ中尉の機体ですか？」

「そうよ。あんたに似て荒い乗り方してるから4〜5回メンテナンスしたら中身全部入れ換えよ」

「そう言わないで下さいよ」

ハンナが整備中だった機体を見て俺は見た目そのままの感想を口にする。

「しかしそんなド派手なオレンジじゃまるで作業用MSだな。その色じゃ敵機のセンサーにすぐ捕捉されて狙い撃ちだよ」

「あんた何も知らないのね、それが狙いのよ」

「はっ？」

アーノルドが俺の疑問に答えた。

「機体を見る限りあの娘さんはうちのエースだよ」

「どういう意味だ？」

「各関節部の駆動疲労と全スラスターの推進剤消耗率が他の誰よりも激しいからよ。あの娘は自ら戦場で四役を買って出て、かつ生還してるパイロットさ、機体の統べてを見りゃそいつの戦闘スタイルなんざ丸解りだからな。整備士の特権」

「その通り同感だね。ホント彼女なんとかしてよ隊長さん！ その調子で今後もやられたら私らの仕事も終わらないし、いくら補給が有っても全然足りないよ」

「なるほど。彼女の資料を見ても戦績ばかりで戦闘スタイルまでは解らないからな。しかしそう言われても困るよ、とりあえず彼女の機体詳細を見せてくれハンナ」

「下にある道具入れの一番上の引き出し」

ハンナがコクピットから足元にある金属製でキャスター付きの引き出しを指差す。

俺は「サンキュ」とハンナに左手を振ってその道具入れの所に飛び降り一番上の引き出しを開ける。

中にはブルーやイエローなどのファイルが5冊程入っていた。

「ごめん言いそびれた、赤いファイルね」とハンナのアドバイスを聞き俺は赤いファイルを抜き出す。

その様子を見たハンナはコクンと頷いた後コクピットに戻ってハッチを閉じた。

俺はファイルを数ページめくり読み思う。

「右端にクリップ挟んでまとめるクセ直したのか？」

「あのジジイうるさいから今後は全部ファイルにまとめろってさ」

「“ジジイ”って？」

「グレンさ、鬼の居ぬ間に言ってやった」

アーノルドが笑う。

だがまさか彼の口からグレンへの愚痴が出るとはな。

しかしファイルを読んでもみるとハンナとアーノルドが言った通りムーバブルフレーム（MSの骨格）の部分発注書の数が異常な多さだった。

機体の型番は“RGZ-00100”と彼女の資料にも書いて有ったものだが：

「そういえばこの機体はあまり見ないタイプだ」

俺の呟きに問題の機体からハンナのマイクを通した声が流れ格納庫内に響いた。

「よくぞ気付いた！ さすがは隊長だね！」

「この機体は過去にエウーゴで開発されたモビルスーツ2機のコンセプトを受け継ぎ、宇宙世紀100年を記念して作られたワンオフ機！ 通称ハンドレット！」

随分熱の入ったご説明だな。

エウーゴといえば地球連邦軍外郭新興部隊ロンド・ベルや今の第13独立艦隊の礎になった組織。

元々反連邦組織のエウーゴが活躍していた時代は旧体制の連邦は腐敗が進みジオン残党も着実に過去の組織力を取り戻しつつあった時代。

そんな激しい三つ巴の大戦をくぐり抜けたエウーゴは数多くのMSを開発し戦果を挙げてきた。

ハンナの熱弁は続く。

「ベースとなった2機はMSZ-006とMSN-00100で双方とも発表された当時は傑作と謳われ、現在でもその過去を知る兵士達は伝説の様に語る！」

たまに彼女は本当に女かと思う。

「まずMSZ-006ですが、その機体の特徴は現在では珍しい可変MSという点。しかし可変MSは構造が複雑な為コスト面や整備性の悪さからRGZ-00100は非変形機として設計された。そう考えるとMSZ-006のコンセプトなど受け継いでいないかに見えるが… 技術者はMS形態でのMSZ-006の高い機動性に注目したの！ その機動性の理由はMSZ-006が両脚部に熱核ロケットエンジンを搭載し巡航形態変形時にその脚部をメインエンジンとして機能させていたから。よってRGZ-00100も脚部に再設計された熱核ロケットエンジンを装備し同じくMSZ-006に装備されていたロングテールバーニアスタビライザーもRGZ-00100用に再設計し装備！」

話が長いな。

「更に変形機能を排した事で機体構造に余裕が出来、頭長高20m近いMSZ-006に対し本機は17.1mまで機体の小型化に成功！ 熱核ロケットとロングテールバーニアスタビライザーと相まって非常に高い機動性と運動性を実現したの！」

俺はMSに乗る事が仕事だがMS自体に興味は無い。

この話は一体いつ終わるのだろうか…

出航

「各ブロック問題ありません」

美しいフィリアの声で艦が正常に機能している事が告げられる。

「出航準備！」

グレンの合図に合わせてブリッジクルー達が忙しそうに通信機で連絡をとったり、レーダーなどの機械で作業を始める。

「クライシ准尉、バック少尉。艦の拘束解除をお願いします」

フィリアが左舷、右舷のナビゲーターに指示を出すと二人は声を揃えて「了解」と短く返答。

フィリアは通信を艦内放送に切り替える。

「総員に告げます。艦の拘束を解除しますのでショックに備えて下さい」

放送後しばらくもしない間にガクンと艦が左右に軽く揺れ安全拘束が解除される。

「エンジン始動」

再びグレンの声がブリッジに響く。

両舷ナビゲーターがキーボードでエンジン始動の指示を打ち込みモ

ニターに数字の羅列を表示させる。

「カウントダウン開始、点火まで27秒」

クライシ准尉が点火までのカウントを読み上げる。

「隔壁開け」

グレンの指示が続く。

フィリアがヘッドセットで「ドックへ。隔壁の開放をお願いします」と指示をドックに伝えると隔壁がゆっくりと開き、大小の数えきれない星々が煌めく無限の海がブリッジ正面の窓から入ってくる。

「18、17、16、15…」

規則正しいクライシ准尉のカウントダウンがブリッジに響く。

「5、4、3、2、1、OKです」

「エンジン点火、微速前進」

「微速前進」

操舵手のランス・ガーランド准尉がグレンの指示を復唱後、ディープ・ヘルメは緩やかに前進を始める。

「熱量、推力、共に問題ありません」

「ふう」

何事も無くスムーズに出航しグレンは思わず溜息を漏らし艦長席に腰をおろす。

「お疲れですか？」

「いや、心配はいらんよランス。テスト無しでエンジンを吹かすのがやや怖くてな」

「それは皆同じですよ」

「だな。それじゃあ皆、月の周回軌道に乗るまで艦内外のセンサーチェックを艦の運航と平行しながら始めてくれ」

「言われなくてもやってますよ。でないと全然間に合わない」

クライシ准尉の発言は仕事に追われて忙しい皆の代弁だった。

「現場命のカイト・クライシ准尉は流石だね。しかしすまん、本来なら出航前に全て済んでいるのに」

「毎度アナハイムのごたごたに巻き込まれちゃ俺達の仕事が出来なくなりますから、これつきりにして下さいよ」

「こらクライシ！ 艦長だって奮闘してようやく出航まできたのにその口のききようは何だ！」

「いいんだよランス君」

「しかし…」

「俺達ならそれをこなせると考えてでしょ？　俺も口が過ぎました。艦長も謝らんで下さいよ」

「本当に私は部下に恵まれてるよ。それでは改めてよろしく頼むよクライシ准尉！」

冗談っぽいグレンの言葉にカイトが「了々解！」と軽く敬礼した後、左舷の各センサーチェックを黙々とこなします。

「おい新入り！　チェック遅い！」

「急いでやってますよ！」

「泣き付いても手伝わんからな」

相変わらずカイトは新人の扱いが荒いとグレンは感じるが、それは彼なりの指導と理解しているので暖かく見守る。

「フィリア。ドックへの回線を私に」

「ただいま」

フィリアはドックとの通信回線を艦長席の受話器に繋ぎ「どうぞ」とグレンを促す。

グレンが左手で受話器を取りドックの責任者に艦の出航準備を手伝ってくれた事への感謝の言葉を伝える。

「ディープ・ヘルメ艦長のグレン・ヴォルフ准将です。この度は貴港の協力を心より感謝します」

他に二言三言交わした後受話器を戻す。

「さてと、チェックはあとのくらいかかるかな？」

「俺の分は周回軌道に乗る前には終わります。今のところ問題は無いです」

「そうか。ヘレンの方はどうだ？」

「……………」

返事をしないヘレンに「お前だよ新入り！」とカイトがキツイ言葉で振り向かせる。

「あっ… あの… その…」

「何か異常か？」

「はっきり喋ろ！」

「航行の問題になる様な異常は無いのですが居住区のカメラに…」

ヘレンは自分のモニターに居住区の映像を表示してカイトに見せる。

「ん…？」

モニターには自室に入ろうとドアを開けているキシヨウ中尉にパーソン中尉が何か話している様子が映されていた。

「ケンカ： でしょうか？」

「口説いてんじゃない？」

「まさかそんな！：」

「端的な報告をお願い出来るかな！」

新入りで的を射ないヘレンの言葉にグレンが大きな声で内容提示の催促をする。

「あっはい！ 2ブロックの居住区でキショウ中尉とパーソン中尉が揉め事の様な：」

「様子わかるかフィリア？」

フィリアはヘレンが表示しているものと同じものを自分のモニターにも表示させた。

「はい、システム上ブリッジのスクリーンには投影出来ませんがこっちのモニターでも確認しました」

「ヘレン音声は？」

会話の対象がフィリアに移っていたのでグレンから再び質問されたヘレンは軽く驚きおろおろと覚束ない手で機械を操作するが「えーと！ えーと！」と見ている側を不安にさせる。

「ヘレンいいわよやるから」

「すみません」

「一応カメラに指向性マイクは搭載されていますが、プライバシーの問題もあって原則使えない事になってまして」

「私の指示でも駄目か？」

「なら大丈夫ですが責任者のIDを一度スキャンしてからでないと」
フィリアの言葉を聞きグレンは立ち上がって彼女の席へ。

「わかった。なら私が直接操作しろって事だな」

「私の方が操作には長けているのでそこにIDを挿していただければ」

「ロートル扱いするな。私も事務から上がってきた軍人だぞ」

グレンはフィリアへ笑いかけ彼女と席を代わり左胸ポケットから身分証を取出して差し込み口に挿す。

するとモニターはグレンの名を表示。

この艦のシステムを初めて扱うのにグレンのタイピングは専門のフィリアやカイトと比べても圧倒的に早く、あっという間に居住区のプロテクトを解除してしまった。

「意外に簡単だな」

グレンの仕事の早さに「こわっ」とカイトは呟いたが幸グレンには

聞こえなかった。

「さてと、何のお話かな？」

グレンはスピーカーのボリウムを指先でつまみ音量を上げた：

ユリ・キシヨウ（前書き）

ユリ・キシヨウ..

地球連邦軍所属の軍人で階級は中尉。

朱いミディアムヘアが美しい女性。

戸籍上は22歳だが実際は17歳。

遺伝子操作で生まれた人間。

謎の多い人物。

グレン・ヴォルフ准将いわく『少年時代のマークに似ている』と、
フィリア・ニクソン曹長は『心を閉ざした印象』とのこと。

しかしマーク本人は『少女のよう』と一個人を指すには皆の印象が異なる。

“不殺の天才”という異名を持つ。
作品のヒロイン。

ユリ・キシヨウ

『人が活きる為に必要なモノは？』

よくそんな事を考えてしまう。

それを考えるのは私が普通と違うから？

何故？

考えるほど眠れない日が続くだけなのに…

それにしてもこの狭く四角い通路は私を憂鬱にさせる。

いや憂鬱と言うよりむしろ苛立ちの方が正しいか。

まあ今居る私の環境がそこだから仕方ないけど『軍人は色弱なの？』
と思うくらい色彩感覚そのものが欠落してるかの如く基地や艦の内
装は白やグレーばかりで無機質。

一様の利に適っているのだろうが人間性の欠如を感じてしまうので
この白く四角い通路が私は嫌い。

私が唯一安らぐのはコクピットだけ。

そう造られたからかも知れないけど、事実そうなのだ。

ジャミングの為に散布された高濃度のミノフスキー粒子漂う無限の
海は施設の無重力訓練に使う水深数十メートルのプールと全く違う。

宇宙には上下も左右も無い。

初めて宇宙に出た時はその心地好さに私の精神は溺れた。

その感覚はまるで地獄の様な天国。

しかし今は戦闘配備命令が出てないのでその天国を体感したくても出来ない。

今回の任務の過酷さも予測出来ないしMSをいじる気も今は無い。

残る選択肢は自室で眠れない身体をベットへ預ける事。

個人的にマーク・ジュディゲル少佐とまたお話がしたいが忙しい彼を引き留める口実にしてはあまりに身勝手なわがままだと思うし。

でも彼と話している時は宇宙に出ている時とはまた違う安らぎを感じる。

初めて会って話たのにそんな気がしないと言うか、何か暖かく懐かしい感じが…

この感覚は一体何だろう？

私は何処かで少佐に会ってるのだろうか？

仮に何処かで会っていたとしても何故こんなにも少佐を特別に思うのか…

わからない。

きつとこれも『活きる為』云々と同様に答えの出ない疑問なのかも知れない。

そんな二つの疑問を確認しつつ四角く長い通路を進み続け、ようやく居住区の自室の前へ辿り着く。

ドアの前に立ち扉に設けられた機械のスリットにIDを滑らせる。

機械的な音が横開きの扉を開けると独房の様な備え付けのデスクとベットのがある殺風景な暗い部屋の様子を覗かせた。

「キショウ中尉！」

部屋に入ろうと歩みを進めた身体を呼び止める声がブリッジの方へ続く四角く長い通路の先から聞こえ振り向く。

「パーソン中尉？」

声の主は同じMS隊パイロットの一人、ロビン・パーソン中尉だった。

「寝るのか？」

私の所までやってきたパーソン中尉は開け放たれた私の部屋を見て問う。

「出航したばかりで私達の仕事は大分先になりますし、休める時休まないと」

「それもパイロットの仕事だからな。だが出航が遅れたから十分に身体は休まっているだろう？」

「私不眠症ですから」

「今暇してる事実さえあればそんな事はどうでもいい」

「……？」

「MSのシュミレータで一戦相手しろ」

「今ですか？」

「暇だろ、なら付き合え」

「お断りします」

パーソン中尉は私の即答に対してあからさまに怒りを顔に出す。

「なに！？」

「理由がありません」

「そんなの訓練の一環だ！パイロットならその重要さが解るはずだろ！」

「艦長か隊長の命令ですか？」

「いや俺からだ」

「なら従う義務は無いです」

冷たく言い放ち私は部屋に入ろうとする。

だがパーソン中尉は私の左手首を強い力で握り引き留める。

「…お前！ 階級は同じかもしれないが俺は先任なんだぞ！」

私はもう片方の手で手首を握る彼の手の甲を痛みが走る様に掴んで解放させた。

彼は左手で痛む手の甲を摩る。

「貴方に私の行動を決める権利は無い」

私の言葉を聞いて今度は私の胸倉を掴み力で身体を引き寄せられた。

「自分が特別だと思い上がるなよ。新型は俺が乗る！」

その事か。

男のプライドってやつね。

くだらない。

「それを決めるのは貴方でも私でもない」

「だから俺はお前より優れているという事実を証明してやるんだよ！」

しつこい。

こんな口論を続けても意味が無いので私は彼を気絶させようと左手に渾身の力を込めて彼のみぞうちに叩き込もうとする。

しかし。

開けっ放しの私の部屋のインターカム・モニターが勝手に起動し、そこから流れた「話は全部聞いたぞ」という声を耳にして拳を打ち込む寸前で思い留まった。

パーソン中尉も声に気付き掴んでいた私の胸倉を放す。

「二人ともこっちへ」とインターカムに促され部屋に入り二人でモニターを見るとそこにはヘッドセットを付けた准将の姿が映されていた。

「勝手にこいつを君の部屋に招いてすまん、ヘレンがセンサーチェックの際にお前達の喧嘩を見付けてな、何事も無く済めばと思っ
て見ていたらこれだ」

「お見苦しいものを見せまして申し訳ありません」

「君が謝る事ではないよキショウ中尉、今回はロビンが悪い」

「……………」

准将のお叱りに対してパーソン中尉は腹に一物持った表情のままモニターから視線をそらす。

そんな彼の態度を見て准将も呆れた溜息をつく。

「ロビン、私は私なりに考えているのだよ。それに今のお前の機体性能だって十分じゃないか」

「それはジュディゲル少佐やキシヨウ中尉も同じです！ 何故です？ 何故戦績の勝る俺ではなくキシヨウ中尉のですか！？」

「なら逆に質問するロビン。そこまで新型にこだわる理由はなんだ？」

准将の問い掛けは的確で鋭かった。

確かにパーソン中尉が今乗っているパヴヂガンも次世代汎用機として開発された試作機なので一般機と比べれば高性能と言えるのに。

「性能どうこうの問題じゃない、准将が俺ではなくこの女に新型を預けるって事は准将は俺がこいつより劣っていると思ってるんです！ だが俺はそれに納得出来ない！」

本当にくだらない男、女の私に負けるのが嫌と恥ずかし気もなく口にするなんてただの男尊女卑じゃない。

「お前なあ…」

呆れ果てた准将の呟き。

こんな人達を纏める側になりたくないな。

「わかった、じゃあキシヨウ中尉と模擬戦をしろ。勝った方を新型に乗せる… これで納得しろ。悪いなキシヨウ中尉」

准将は最後の言葉を私へ申し訳なさそうに継ぎ足した。

「命令ならば従うまでです」

しかし妥協案中の妥協案って感じ。

まあそうでもしないとこの輩は納得しないから仕方ないか。

パーソン中尉は『その言葉を待ってました!』と言わんばかりの表情。

「だが一つ条件だ」

場の空気を正す様に准将が切り出す。

「シュミレータは無しだ、実戦形式でやってもらうぞ」

モニターの奥から「よろしいのですか?」と小さく准将を諭すフィリアさんの声が聞こえたが准将には何か考えが有るようでその言葉を気にせずにとだまっすぐこちらへ眼光鋭い視線を向け続けている。

「私がかまわないです」

「俺もその方がやり甲斐があります」

「そう来なくちゃな、ではロビンは先に格納庫で出撃命令が出るまで待機してろ」

「了解!」

いきいきと返答を済ませたパーソン中尉はするりと素早く私の部屋を出ようとする。

「まだ言う事があるんじゃないかロビン」

親が子供に注意する様にモニターの准将はパーソン中尉を呼び止めた。

だがパーソン中尉は何の事か解らずポカンと立ち止まっている。

「私がインカムで招き入れたがここはレディの部屋だぞ、その意味がわかるか？」

「……？」

パーソン中尉は相変わらず意味が解らないで立っている。

「キシヨウ中尉に『失礼しました』だろ馬鹿者！」

ようやく気付いたパーソン中尉は慌てて私に「失礼しました！」と敬礼するがすぐに立ち去ってしまった。

「まったく… すまんなキシヨウ中尉」

「別に見られて困るものは無いので」

「そういう問題じゃなくけじめだよ。23にもなっているのにマナーとモラルを知らな過ぎるのだよ彼は」

「本当に准将は紳士ですね」

「ただでさえむさ苦しい世界だ、おかげで下品なやつが多くて困るのだよ」

「では何故軍人に？」

私は素朴な質問を准将にした。

しかし准将に「ハッハッハ」と何かしらの含みを持った笑い声でごまかされた。

准将は話を続ける。

「君の事だから負けろとは言わないが、空気は読め」

「それはパーソン中尉次第です」

「確かにその通りだが、去年の君の働きを考えると余裕だろ」

「お世辞は結構です」

「君の場合ロビンとは逆に謙遜し過ぎだな、早々で異名が付くパイロットなど中々居ないもんだよ」

去年グラナダのデモ鎮圧作戦が私にとって初めての正規任務だった。

作戦対象がグラナダ市民を主としたデモ隊であった故に機関が私の始動に相応しいと判断したようね。

現地に付けば相手は作業用MSとデブリから改造された機体ばかりだったが『一応はグラナダ市民なので』と市から撃墜許可も下りず、デモ隊包囲作戦やグラナダ市庁を過剰な嚴重警備で反政府主義者の感情を逆なでした誘い出し作戦などしか実施出来なかった。

幸い抵抗勢力はバラバラで大きな徒党を組む事も無く済んだから3機しか現地に配備されなかった自軍MSでも沈静出来たけど。

首謀者特定の為に実行犯の機体を撃墜せずに行動不能にする手間が発生した訳。

まあ命令だからやったがのおかげで私は“不殺の天才”という不名誉な異名が付いた。

「私は嫌味にしか聞こえませんか」

「そういう意味合いも有るかもだが、大概その嫌味は真似る事の出来ない才能故の嫉妬だよ」

なるほど。

そういう考察は流石年の功といった所か。

「とにかく了解しました、私もこれから格納庫に向かいます」

「……本当によく似ているよ」

「何がですか？」

「別に何でもない。模擬戦の設定が決まったらお前達のMSに送る。

長々と失礼した」

「こちらこそ、色気らしい色気も無い部屋で失礼しました」

「私からしたら年頃の娘さんの部屋を覗けて目の保養になったよ。では失礼した」

モニターが消えて部屋は真っ暗になる。

それでは一仕事といきますか…

むさ苦しい連中

「そしてこの機体のもうひとつの特徴がMSN-00100から受け継いだ対ビーム性能！ MSN-00100は特殊な塗料でそれをやっていたのだけどもあまり有効な対ビーム性能は発揮していなかった。なのでハンドレットは対熱性と熱伝導に優れたセラミックに注目して装甲が作られたの、特殊な技術でハニカム構造化された密度の異なる極薄の磁気発生セラミックを何十層も重ねて作られた装甲でセラミック特有の重量を減らし、装甲表面にナノレベルの超微細な凹凸がついているの、そこにビーム弾が着弾するとあら不思議！ 硬い鋼鉄をも溶かし貫くビームが全く効かない！？ 理由は簡単、磁気と微細な凹凸がビームを形成するメガ粒子を飛散させて威力を減殺させ、対熱性と熱伝導性に優れた特殊なセラミック装甲は装甲表面の発熱と同時に熱伝導で装甲全体へ熱エネルギーを分散させて熱を冷ましてしまうから！ もうなんて素晴らしいの！！」

長々と続くハンナの熱弁はもはや俺の右の耳から入って左の耳へ抜けていくばかりだった。

しかし本当に彼女はMSが好きなんだなと思うよ。

「ねえマーク！ 貴方も素晴らしいと思うでしょう！！」

ハンナは唐突に俺へ同意を求めた。

だが途中からほとんど話を聞いていない俺なので「ああ…」という苦笑した返答が限界だった。

でも彼女は「でしょ！」と素直に喜んで。

それを観たら何だかホッとした。

それにしてもハンナは随分とこの機体に詳しいのだな。

「もしかしてその機体はハンナが手掛けて試作されたのか？」

「バレたか」

「バレバレだよ」

「流石はニュータイプ！では特別に試作されたハンドレットのもう一つの秘密も語ってあげましょう！！」

『もう勘弁してくれ』と音をあげようとしたがそれより一足早くハンナが喋りだしてしまった。

「何年も前に試作されたまま目の目を観ずに倉庫で眠り続けてたこのハンドレットが今更実用試験に入った理由、それは……！！？」

途中まで話したハンナであったが。

エアロックのハッチを開けて倉庫に入ってきた人影に気付き急に黙った。

「あらロビン坊や！」

「ハンナさん、いい加減その呼び方やめて下さいよ」

「“坊や”は“坊や”だもの、卒業したければ自分のMSぐらい自分でメンテ出来る様になることね」

絶妙なタイミングで入ってきたロビンが天使に思えた。

「自分は動かすのが専門ですからメンテの仕事は自分より腕の良いハンナさん達に任せます」

「あんたねえ！ いい加減にしなさいよ！！」

「ロビン、自機のメンテも俺達の仕事だと教えたはずだぞ」

ロビンは俺の姿を認めると「これはこれは隊長殿」と皮肉たれた。

「そんな古臭い風習じみたもんばっかやってるから軍である組織すらも形骸化するんです。自分は自分の仕事を極め、メカニックはメカニックの仕事を極めて分業した方が能率的です」

「パイロットはメカニックとの信頼が無ければ死ぬだけだぞ」

「そんなのただの理屈です。整備不良は整備士の非ですが不備の機体を理由に死ぬ様なパイロットなら、完璧なコンディションの機体で戦場に出ても敵に即撃墜される様な実力しか持ち合わせていませんよ」

「お前本気で言っているのか？」

「本気も何も事実ですよ」

それだけ告げるとロビンは俺の前を横切り自分の機体を探す。

「ハンナさん俺の機体は？」

「一番奥、カタパルトハッチの右側よ」

ハンドレットから流れるハンナのマイクを通した言葉を聞いてロビンは一番奥に並ぶ濃紺のパヴチガンへ向かう。

「パイロットスーツ何か着てこんな所で偵察にでも出るのか？」と俺は彼の背中に話かけるとロビンは宙に舞っていた身体を軽やかに翻して自機に向かいつつ返答した。

「キショウ中尉と模擬戦です。准将に意見したら模擬戦で勝った方を新型のパイロットにするってなったので」

一瞬まさかと思ったが先程のロビンの剣幕で意見されたらいくらグレンでも言いくるめるのは難しいか。

それにグレンも馬鹿ではないしキショウ中尉が勝つと見込んで彼女との実力差を体感させロビンを納得させる気なのかもな。

血気盛んなロビンにはその方が正解か。

相変わらず汚いなグレン。

とは言ってもロビンも成長して一流の腕になったらしいし、さっきの奴の自論を聞く限りそれなりの実戦経験は積んだ様子。

俺と二人でテストパイロットをした時も生真面目に俺の機体の使い方を真似ようと必死だった。

熱血馬鹿かと思いきや意外にひたむきな奴な故に昔のままという事

は無いだろう。

一概に彼女が勝つとは言い切れないか。

面白くなりそうだ。

「ほって置いて良いの？」

気が付くとセンサーチェックを終えたのかハンナはキショウ中尉の機体から降りていて俺に話かけてきた。

「何が？」

「坊やのさっきの話、あんな考えで乗り続けたら下手すると死ぬよ彼」

「口で言って解る奴じゃないさ」

俺がファイルに目を通しながら返答したのが気に入らなかったのか、ハンナは俺に近付いて来て読んでいたファイルを俺からもぎ取る様に奪い、彼女の美しい顔が息のかかる距離まで迫ってきた。

「あんた隊長でしょ！」

「まあ」

「なら何とかしなさいよ！ それも隊長の仕事でしょ！！」

「近くで見ても御綺麗ですね」

「ふざけないでくれる！」

「はいはい、でもそんなに怒らないで下さいよ。話して解る奴じゃないってハンナさんも知ってるでしょ」

「でもあんたの部下よ？　ならあんたの責任じゃない」

「准将に何か考えがあるみたいですよ」

「艦長の考え？」

俺はおそらくグレンはこう考えているであろうという推測をハンナに話そうとした。

だが不意に現れた人影から声がかかる。

「お二人共失礼ですが」

「…？　キシヨウ中尉か。ちょっと曹長と大人の話をね」

噂の本人登場ってか。

「何のお話ですか？」

「聞くなよ」

「聞かれてはまずいお話ですか？」

何故執拗に迫る…

「少佐に今晚俺の部屋についてお誘いよ」

ハンナめ、口からでまかせを…

「少佐はそんな事言う人ではありません」

言いようは軽かったがキツパリと言い切ったキショウ中尉の発言は場に流れてた空気や時間を止めるに充分な威力だった。

「…馬鹿ね冗談よ、仕事の話」

キショウ中尉の覇気に気圧されたハンナは白状するが、相変わらず中尉は何か嫌な空気を放つ。

「准将の命令らしいな」

まるでハンナをフォローする様になったがキショウ中尉に話し掛けてみた。

すると彼女の表情が少し和らいだ。

「はい」

「…苦労様」

「仕事ですから」と彼女は返答して自分の機体のコクピットへ身体を飛翔させた。

「凄く怖かったんだけど…」

「アホな事言うからですよ。そういうからかいはもう止めた方が良いでしょう」

「彼女あんたの何よ？」

「新しい部下です」

「それだけ？」

「昨日初めて会ったばかりですよ。何も無いです」

「それだけじゃない気がする…」

いい年したハンナが怯えながら話すのが可笑しかった。

「ハンナさん、私の機体いじりました？」

ド派手なオレンジ色の機体からキショウ中尉の声が流れた。

幸い先程の覇気を帯びた声ではなかったがそれを聞いてハンナが肩を震わす。

「えっ！ あっ！ センサーチェックで火入れっぱだった！」

「作業はどこまで？」

「もう終わってるわ」

「ありがとうございます」

何でもない普通の業務連絡だが、キシヨウ中尉の声に怯えながらハンナが返答するので思わず笑いそうになった。

「何よその顔！」

「別に」

「なんかむかつく」

ハンナの八つ当たりにはやや困ったがおかげでキシヨウ中尉がまだまだ子供だということはわかった。

「作業中の格納庫内の者に告げます、MS出撃の為120秒後に庫内の空気を抜きますのでノーマルスーツの着用と、作業員でない方は待機ルームへの移動お願いします」

フィリアの艦内アウンスが流れ、まだ作業中だった数人のメカマン達が切り良い所で作業を止めエアロックへ移動を始める。

だが予定に無い指示に対して皆が小声でちらほらと愚痴をこぼしていた。

「全く怠慢だな」とアーノルドも愚痴をこぼしながら俺の機体から降りてくる。

「窒息する前に行くぞ」

先へ行こうとするアーノルドの服の袖をハンナが掴んで引き止める。

彼女はアーノルドの顔を見ずに俯いていたが表情は何か言いたげな印象だ。

「……………」

「なんだよ？」

「…あんたさっきの話全部聞いて何も言わないわけ」

「あの坊主か？ それとも娘の方？」

「両方よ馬鹿！」

「…はあ」

アーノルドがハンナに返した声は深い呆れた溜息であった。

「ロビンの事は俺にもそれなりの考えがある。もう一つの件はいくら俺を妬かせたくても相手がマークじゃ無意味だ」

「…はい？」

彼の言葉の意味が解らず我ながら阿保みたいな声が出た。

「さっさと着替えて仕事に戻るぞ」

「…！」

ハンナは駄々をこねる子供の様に拗ね、俺達を残して先にエアロツクへ向かう。

「何です？」

「俺が仕事ばかりで寂しいんだよ。昔はお互い様だったのに最近急にな…行くぞ」

なんだか二人ともらしくない。

俺はアーノルドがいつもとなんなら変わらない風体を装っているのをつぶさに感じながら二人でエアロックに向かう。

エアロックの中は更に両隣へ分厚いドアが設けられており、そこでメカマンとMSパイロットは双方の更衣室に分かれる構造だ。

そこでアーノルドと別れパイロットの更衣室に入るが中は空っぽで俺の他にパイロットは居ない。

俺は一人寂しく無人の更衣室の中央まで進み自分のロッカーから黒地にライトグリーンのラインが入ったパイロットスーツとヘルメットを取り出しそれを身に着ける。

パイロットのノーマルスーツは繊細な動きを必要とするので一般の物と異なり装備が短略されていて宇宙服としてはなんとも頼りない印象だが、AED等の生命維持装置はしっかり装備されている。

また同様にメカマンのスーツも一般向けとやや異なる。

それはメカマンが一般兵より比較的危険地や危険物の取り扱いが多いので肩、胸、肘、膝等のシールドが厚く作られているからである。

よって重さも1割増しで着こなす事自体が容易でない。

パイロットスーツは逆に一般向けより1割近く軽い。

間もなくして更衣室内のモニターが自動で起動し、画面にグレンの姿が浮かび上がった。

「まず皆に予定外の出撃をさせる事を詫びる。これから余興を兼ねての模擬戦闘をキシヨウ中尉とパーソン中尉にやってもらおう事になった」

いつも通りのグレンの口調。

謝ってばかりだがこれが中々縦社会に生きてきた軍人からすると好印象らしい。

思うに皆今まで高慢な上司達にこき使われてきたからうんざりしていたのだろう。

「状況設定としては隕石群に潜伏する戦艦に一機のMSが戦列を離れて切り込み攻撃を仕掛ける。艦の方はMS一機を出撃させてそれを阻止するという想定だ」

01隊が襲われた状況を踏まえたわけか。

「そこで戦艦に攻撃を仕掛ける役をパーソン中尉に、戦艦の護衛をキシヨウ中尉に、戦艦役はもちろん本艦“ディープ・ヘルメ”だ。タイムリミットは15分、その間にパーソン機を撃墜すればキシヨウ中尉の勝ち。ディープ・ヘルメの撃沈、あるいはキシヨウ機が撃墜の場合パーソン中尉の勝ち。そしてタイムリミット15分を越え

た場合もパーソン側の戦列が本艦を射程に捉えるのでパーソン中尉の勝ちだ。いいか？」

酷い状況だな。

この状況を普通に考えたら護衛側の勝率は25%以下。

だがこれでもようやくロビンと五分五分でやれるってものか。

「マーク。こっちでもう始まっているから早く来い」

不意に背後の扉を開け俺に声をかけてきたのは整備副長のロークだった。

俺は促されて向かいの更衣室に向かう。

中に入るとパイロットの更衣室とは打って変わって散らかった室内だったが、とても賑やかで居心地は良い。

だが何故か更衣室の中央に置かれたベンチの真ん中には握りしめた様な皺くちやの札の山が積まれている。

「絶対ボウズが勝つな！」

「いやいや女の底力を甘くみない事ね！」

「あの想定じゃいくらなんでも不利過ぎるだろ姐さん！」

どうやらすでに賭けが始まっているらしく皆熱苦しいほど盛り上がっている。

「お前は どうする？」

右隣から声がしたので見ると着替えを終えたアーノルドが腕組みをして無煙パイプを口にくわえながらロッカーによりかかって立っていた。

アーノルドは冷静な表情で盛り上がっているメカマン達を眺めている。

「どっちに賭けるか？」

「いや、結果なんぞ目に見えてるから参加するかしないかってレベルだよ」

「遠慮します」

「右に同じ」

周りは10だ100だと札をベンチに押し付ける奴ばかりで面白いが、それに一切参加せずに眺める俺達二人もまた異様な味を漂わせていて面白いかもな。

「ならあんたらの予想教えてくれよ」

「それじゃあお前から金取るぞローク」

小声で俺達から予想を聞き出そうとしたロークをアーノルドが言葉で突っぱねた。

にしてもこういう時のメカニックマンはいつもこうだ。
飽きないのか？

「姐さんは自分の機体だからだろ？」

「あの機体を乗りこなす娘よ！？ 勝って当たり前じゃない！」

「それもそうだ！ 俺はお嬢ちゃんに20！！」

そんな結果が出なきゃただの意地の張り合いじゃないか。

本気でうるさい。

「いつも通りに見えるか？」

隣のアーノルドが聞き逃しそうな小さな声で俺に聞く。

「ハンナさんですか？」

「あいついつもと同じ様に見せてると思わないか？」

「…まあ」

「…そうか」

やはり二人とも変だ。

賑やかな声と風景を眺めているとまた更衣室の扉が開いた。

「やっぱり盛り上がってるな、俺は小僧に50だ」

「デイー、やっと来たか！」

中に入ってきた黒地に青いラインの入ったパイロットスーツを着た男はMS隊副隊長のデイー・ビーツ大尉。

昔に俺へMSの指導をしてくれた大先輩だ…

美女と野獣

男が本を読んでいる間にコーヒーを飲み終えてしまったので黒服は気をきかせてコーヒーのお代わりを注文した。

それを受け熊髭がカウンターの向こうでコーヒーを淹れる。

熊髭はトレイに二つのコーヒークップを乗せてテーブルまで運び、丁寧に空になったカップと置き代えた。

だが熊髭はカウンターに戻らずにトレイを抱いて読書をする男の姿をじっと笑顔で見詰めている。

「……………」

「……………」

「…目障りなんだが」

「それは失礼を！ ……何ページまで進みましたか？」

「…？ メカニックが賭けをする場面だ」

「“デイー” ってキャラクターが出て来た所ですよね？」

「そうだが？」

「どうですそのキャラは？」

「聞かれてもまだ名前が出ただけだよ」

男は熊髭の問い掛けに苦笑雑じりの返答をする。

「お前のお気に入り登場人物か？」と黒服が熊髭に質問。

しかし熊髭はそれに答えずに不気味な含み笑いをして場を気色の悪い空気で満たそうとする。

思わず黒服は「…何だよその笑いは？」と問い掛けるが熊髭は不気味な笑いを止めずにそのままカウンターに戻っていった。

「お前の笑い方はどれも特徴が有り過ぎて気持ちが悪いよ…」

黒服の本音とも冗談とも取れる言葉を聞いて今度はガハガハ笑いをする熊髭。

この山男の様な風体の男は見ていて飽きない部類の人間であるが。

四六時中一緒に居たらさぞかしうざったい存在だ。

おまけに「それが俺様よ！」と変に自慢する辺りが尚更うざったい。

そんな漫才の様な滑稽な空気漂う店のドアが唐突に勢い良く開き、一人の女性が店内に飛び込む様に来店してきた。

「たっだいまぁー!」

「よう、お帰り！　ってお前いい加減裏から入れよな!」

「だって狭くて汚いから」

驚いた事にその女性は古本屋の娘だった。

男と黒服は哑然と彼女と熊髭が仲良く会話をする光景を本当に現実
に起こっている出来事なのかと疑いながら眺めている。

「なら客が居るか確認してからにしろ」

「いつも客なんて居ないじゃ…」

彼女は振り向きながら言葉を言いかけたが視野に黒服と男を認めて
留まった。

「ごめんなさい！　いらっしやいませ！！　…？　ってお客さんじ
やないですか！？」

「ああ、お客だよ」

「違うって！　うちの古本屋の！！」

「知ってるよ」

「…えっ？」

唐突に登場した彼女の存在でこの寂れた喫茶店の雰囲気明るく華
やいだが。

同時に男と黒服は共通の疑問を抱いた。

それは『彼女と熊髭の関係はいったい何だろう?』である。

「よくお前の仕事ぶりをこの方から聞いているよ」

二人で勝手に話が展開しているので黒服は「あのおく?」とお伺いをたてる。

それを見て熊髭が「…ああ、すまんすまん」と話の輪に男達も引き入れた。

「びっくりしたろう。こいつは俺の姪だ」

「…まぢ?」

「姪っ子でえゝす」

娘は愛嬌良くお辞儀をして挨拶。

「…うそ」

「本当だよ」

黒服は目の前の事実を否定したいかの様な呟きを吐く。

「だって全然似てないし」

「別に親子でもないし、こんなもんだろ」

熊髭は顔に苦い笑みを浮かべて返答する。

だが男も黒服と同じ感想を抱いていた。

「私のお母さんも叔父さんに似ないで美人だから」

「どうせ俺の見た目は獣か何かの類だ！」

娘の言葉に熊髭は嘆きの言葉を返すが。

その後二人は顔を見合せて笑いだした。

嫌味な言葉でじゃれあえる二人の様子からすると確かに親しい関係
と思える。

それに見た目の印象は違えど豪快に笑う二人の笑い方も同じ血が流
れる証拠だろう。

「俺に隠していたのか？」

「あっ!？ いえ! そんなつもりでは!！」

「ハハハ! 言うタイミングが無かったんでしょ？」

男の質問に対してうろたえてる熊髭を見て姪っ子は柔らかなフォロ
ーを入れるが。

そのフォローは次の黒服の言葉によって看破される事になった。

「違うだろ。俺達に似てないって指摘されるのが小恥ずかしかった
んだろ」

「ハハハ： いやその～： うん～：」

いつもの様に熊髭は笑ってごまかそうとしたが。

今回は思いの外素直に認めた。

しかしやはり小恥ずかしいだったのであろう熊髭の表情からは照れが滲み出ている。

「それに姪っ子がお前の顔にそっくりだったら親戚一同落胆する」

「はは、確かに。待ちに待った孫娘がこの顔だったら変な気苦労が増えるもんだ」

黒服が付け加える様に言った冗談に店の中に居た皆が笑った。

大男は自他共に認める自身の容姿に。

若い娘は叔父の笑う姿に。

ある者は友人の純真な心に。

そして男はその場の心地好い愉快的時間に笑っていた。

「今更んな事気にするもんでもないだろ。長い付き合いなんだから」
ぼろりと黒服の口からこぼれた言葉に対し男は敏感に反応し「こら！」と小声で黒服に釘をさした。

案の定黒服の言葉を耳にした娘は「長い付き合い？」と興味を示す。

「そういえばお客さん達は叔父さんとどういう知り合いなんですか？　なんか話聞いてたらただのお客さんと思えない感じだし」

「えっ？　いやなんて言うか…　まあ悪友であるのは事実かな」

下手なごまかしだった。

「へえ…　ねえ叔父さんどんな知り合いなの？」

ごまかされた彼女は核心を掴む為に、今度は熊髭に質問した。

もちろん男と黒服は真実を伝えてはいけないという視線を熊髭に送るが。

熊髭はそれを見て軽くうろたえていた。

「…　何と言うかその…　仕事が一緒でさ」

そう言って熊髭はお得意のガハガハ笑いをしたが、額に汗して笑っていた。

「…！？　って事は軍人さんなの！？」

バレた。

男と黒服の二人は共に熊髭を『情けない』と思い苦笑いをするしかなかった。

男達の職種を知って娘はウキウキとして二人のテーブルに近付いて

いく。

「なんだ。そうならそうと早く言ってくださいよ！」

彼女はそう言うのと黒服の肩を豪快に一発叩いた。

あまりの痛みに黒服は軽く呻いたが直ぐに彼女に向いて笑顔を作った。

それを見て男は声を堪え笑う。

「あれ？」と娘はテーブルに置かれた本に気付く。

娘は本のしおりが挟んであるページが大分進んでいる事に気が付いた。

「またハイペースで読んでる…」

「そうか？」

「そうですよ。私的には内容を結構濃厚で複雑にしたつもりなのに、そんなに早く読まれたら困ります！」

娘の言葉に男は「ゆっくり読んでいるとも」と苦笑いしながらの返事。

誰かに似てなんとも活発で元氣潑刺とした彼女の姿は皆を楽しく愉快な気持ちにさせている。

娘の言いように気圧される男の姿を静かに見ていた黒服と熊髭の表情もやはり笑いを含んでいた。

「ちょっと貸してください！」

娘は本を取り上げてしおりの挟みであるページを開いた。

「……………」

彼女が本を読む姿を黙って見守る三人。

「…あー!!！」

突発的に出た娘の声に皆が肩を震わせた。

「もう“ディー”が登場してるじゃないですかあゝ」

ページに記されていた内容を読んで娘は誰に向けるでもなく愚痴っぽくクレームをこぼした。

「せっかくだからこのキャラクターの事を説明してから読んでもらおうかと思ってたのにいゝ…」

娘はわざとらしい落胆を口にして男に本を押し付けた。

「ハハハ、まだ名前を読んだくらいだから大丈夫さ」

黒服はそのわざとらしさを知ってか知らずか彼女へ笑いながら言葉をかけた。

「何で解るんですか？」

「さっきマスターも『何処まで進みましたか?』って話してた所だったからさ」

彼女が店へやって来るまでの男達の会話の内容を知った娘は「そうなんだあゝ」と微笑んで、熊髭のいるカウンターへゆつくりと振り返り、彼へ何やら言葉にしにくい含みのある視線を送っている。

「なにになに?　なんか訳ありかあゝ?」

この状況で口を挟む様な奴は野次馬でしかないが、それは黒服だった。

これが彼の性分なのであろう。

「訳ありも何も“ディー”のモデルは叔父さんなの」

「ハッハッハ!」

店の中に熊髭の笑い声が響く。

「はあ?」

「叔父さん元軍人だからいろいろアドバイスもらうついでというからお礼の気持ちで書かせてもらったの」

作者である彼女の叔父に対する粹なはからいを知り男は「とんだゲスト出演だな」と熊髭に暖かな視線を送る。

「何か俺も少し読みたくなってきた…」

「大分脚色されていて実際の俺よか男前になってるがな」

なんとも嬉し恥ずかしい表情で熊髭は微笑んで語る。

それを見て黒服は「タルトだけではあきたらずかよ」とまた冗談を言う。

「あら、タルトまでいただいてくれたんですか！」

「ああ、美味しくいただけさせてもらったよ。あれは君のレシピらしいね」

男の褒め言葉を聞いて彼女は「なんか恥ずかしいなあ」と少し頬を赤くしてはにかんだ。

「いやたいしたもんだよ！ あんなに美味しいタルトを作れるなら嫁入り先には困らないね！！」

「……………」

たかがタルトで何故娘の嫁ぎ先の話を黒服は切り出したのか皆理解出来ず沈黙する。

「…やだもう！ お菓子の一つや二つ作れますよそりゃ」

軽く戸惑った様子で黒服へ言葉を返した娘の姿を見て熊髭は何か不服そうな表情を浮かべ、カウンターの中で腕組み仁王立つ。

「…なに勝手に話進めんだ。レシピはコイツだが実際に作ったのは俺だよバーカ」

「知ってる。でもレシピは彼女だろ」

「いちいちうるさい奴だなお前は」

二人の痴話喧嘩を見て男は『幾つになっても血気盛んなガキのようだ』と思っているのだろう、黒服と熊髭の昔の姿を思い出しながら微笑んで眺めている。

「ハハハ、それじゃお邪魔みたいだから私は上に行くね」

娘は仲良く喧嘩する二人の姿を見て遠慮したのであろう、邪魔にならないよう配慮し熊髭へ一言告げてカウンター奥にある階段へ向かう。

「古本屋はもうイイのか？」と階段に足をかけた彼女の背中へ熊髭が声をかける。

「今日は大丈夫だから書くのに専念しといてって帰されたの」

階段で反響した声を熊髭達に残して彼女は2階へ上がっていった。

彼女の気配が消えた店ではオーディオから流れるチェロの穏やかな響きで会話のない店内を寂しく演出している。

それはまるで嵐の去った後の静けさだ。

「あいつ自分の言いたいことだけ言って挨拶もなく行きやがった」

「まあ良いではないか、ここは軍隊でもないし戦争も終わった」

「しかし礼儀はわきまえませんと」

「一般家庭ではこんなもんだろう、それに彼女と一緒に住んでいるのならばここは彼女の家とも言える。違うか？」

男は本をテーブルに置きながら明朗な語り口で自身の考察と推理を熊髭にぶつけた。

「大佐には隠し事が出来ませんなあ」

堪忍した熊髭は自白の台詞を呟く。

「えっ！　じゃ今あの娘と一緒に住んでるのかよ!!」

二人の話を聞いていた黒服は驚いた表情で熊髭に問う。

だが熊髭は黒服の質問にすぐ答えずに、彼へ冷ややかな視線を送り一言告げる。

「…だから？」

「あんな可愛い娘と一つ屋根の下に住んでるならもっと早く教えてくれよ」

「なんで俺が逐一報告しないかんのよ」

「つれねーなあ」

どうにも熊髭は姪っ子と一緒に住んでいる事を黒服に知られたくな

かったらしい。

それは恥じらいとはまた違う、親心の様な気持ちから来る感情なのであろう。

「まあいいではないか、しかし少し気になる事があるのだが？」

「何ですか？」

「彼女は私達が軍人と知ったのに、それ以上詮索をしなかった所が妙に気になる」

男の抱いた疑問に熊髭は思い当たるものがあつたのであろう「ああ」と軽く声を上げて男の疑問に答え始めた。

「あいつなりの気遣いをしたのだと自分は思います」

「どういう意味？」

「軍人ってのは人の生き死にが仕事だつてのをあいつはよく知っているからよ」

重たい言葉が続く。

「軍人は偉いとか野蛮とかそんなもんより、それしか能のない人達の苦しみに悲しくなっちまう優しい子なんだ。叔父がこんなんだからかな…」

そう言うと熊髭は己の右足を憊気に見た。

「なるほど。あれは彼女が自分の好奇心を最大限我慢した結果か」

「おそらくは」

「…すまん。なんか悪い事聞いたな」

三人の会話に先程までの賑やかさは無い。

戦士として生きてきた彼等が今までどれ程の死線を抜けてきたかは計り知れない。

しかし戦争が終わった今も彼等の心と身体に刻まれた傷は癒えず痛み続けている事は容易に想像出来るだろう。

あの娘はそれを知るが故に慎んだのだ。

「通夜の様な空気にしてしまったな… マスター、曲を変えてくれないか？」

「わかりました。何にしましょう？」

「j a z zにしてくれ。あるだろ」

「デイヴ・ブルーベックなら幾つか」

「それでいい。お勧めを頼む」

男のリクエストを聞き熊髭は小さく「かしこまりました」と彼なりに上品な返事すると男達から姿を消す様にカウンターの途中でしゃがんだ。

間もなく鳴っていたチェロの曲が止み、リズムカルなピアノ曲に変わる。

「ありがとう」

「お安い御用です」

「もう杖を使わなくてもしゃがんで大丈夫なのだな」

「ええ、最近の義足はよく出来ていてあまり痛みませんから」

一見すると熊の様な大男の店主だが。

彼の右足は義足である。

これが彼の戦争の傷であり、喫茶店の店主になったきっかけだ。

「それならいつでも復帰出来るな」

「いや、もうお断りだね」

「あらま」

先程の様にふざけた口調で黒服との会話が始まった。

「失くした時は悔しかったが。今となってはこの足のおかげで引退出来たし、念願の店も持てた」

「言うねえ」

二人の掛け合いで再び店内は賑やかな空気になる。

男の表情もにこやかだ。

「ハハ、心配ご無用だったな」

「おかげさまで」

「いやはや、本当にお前は前向きで気持ちが良いよ」

「お褒めにあずかり光栄です」

「大佐は嫌味も含んで言ってるんだ!」

黒服が継ぎ足す様に一言告げると男は大きな声で笑った。

二人はそれに釣られて笑う。

「いやいやすまん。ではそんな愉快的なマスターをモデルにした“デュー”の活躍を拝見するよ」

男はテーブルに置いていた本を手取る。

熊髭はそれを見て彼がまだ本の読み途中であった事を思い出し「これは失敬!」と詫げる。

「いや面白い話が聞けたのだ。謝る必要は無いよ」

優しい口調で熊髭に告げ男はしおりを挟んだページを開き続きを読

みだす…

むさ苦しい連中・2

「坊やに賭けて良いの？ 絶対後悔するよ」

「一応俺とバディを2年以上やってるから賭けなきゃ拗ねやがる」と先輩は笑う。

バディというのは二人一組の班の事で、独立隊のMS部隊で使用するシステムだ。

本来は海軍等で用いられるが、少数精鋭を束ねる組織の大概は小隊でなくバディ・システムを採用する場合が多い。

「それは可哀相に、あんたも大変だね」

「そうでもないさ、なにせあいつは俺の弟子だからな」

弟子？

「あいつに何か仕込んだんですか？」

背後からかけた俺の声に気付き先輩は俺の方へ向く。

「おお！ そんな所に隠れてたのか」

「別に隠れてた訳じゃないですよ」

「じゃあ何か？ 二代目ブラックホーク様は相変わらず鷹だけに高見の見物か？ いい加減郷に入っては郷に従えよ」

そんなギャグじゃ笑えないって。

元々“黒い鷹”は俺の先輩デュー・ビーツ大尉の異名だった。

俺が先輩と同じ隊にいた時、俺は先輩独自の操縦テクニクと戦闘スタイルを学びパイロットとして優秀な戦績も得た。

すると先輩は『これで安心して引退出来る』とし俺に異名を譲って彼はMSから降り出世街道に向かう為前線から離れたのだ。

しかし：

先輩はMS操縦以外はからっきし駄目だったらしく、結局此処に流れついたんだとか：

先輩から賜った“黒い鷹”の名に恥じない仕事はしてるんだから、俺のスタンスにケチは付けて欲しくないものだ。

「隊長様々は負けるのが怖いのよ」とハンナも俺に煽りを入れたが、なんでもん構う事もない。

メカマンの戯れの中エア抜きを終了を告げるブザーが鳴り、更衣室内に設置されているシグナルがレッドからイエローへ切り替わる。

アーノルドは『待ってました』と言わんばかりに「お前等、さっさとバイザー下ろして戻るぞ」と他のメカマンを急かし立て、メカマン達もそれに応え直ぐさまベンチに積まれた皺くちゃの札一つのロッカーに詰めてキーロックをかける。

「姐さんココに入れますよ。勝った方が山分けだ！」

「いつまでグズグズやってる！ 行くぞ！！」

アーノルドの急かしの言葉は毎度暴力に近い怒号である。

しかし慣れとは恐ろしい。

メカマン達は皆彼と付き合いが長いので全員が「へえーい」という気の抜けた返事をするのだ。

それに関してアーノルドも怒らずに独りそそくさとドアを開けてエアロックに入っていく。

ヘルメットのバイザーを閉じながらハンナが先輩に問う。

「あんた等はどうすんの？」

「俺は見学さ、あの小僧がどこまでやれるかのね」

「それだけ？　なのにパイロットスーツを着るの？」

「念のためだよ。何か起こる気がしてな」

「また勘？　あんたって本当に変よね」

それを言いながらハンナ達は更衣室から出て行った。

メカマン全員が更衣室からエアロックへ移り、俺と先輩はまるで皆の留守番をするかのように残る。

「さて、俺達はどうするよ？」

「とりあえずパイロットの更衣室に移りませんか？」

「いや、あそこより此処の方が居心地が良い。それにおっさんの事だ、バルーンやら無人偵察出してモニターに中継映すだろ」

「まあ確かに、それより…」

先輩は俺の声を遮り言葉を発する。

「何を仕込んだかだろ。何もしてないよ」

俺は先輩の言葉を黙って聞いてはいたが、先輩が何もしない訳ないと思っていた。

この人は自分が思う以上に面倒見が良い。

同じ隊に居た時なんか俺は既に自分の操縦技術はトップクラスだと思っていた。

だがこの人だけは俺の操縦に不服でそれとないアドバイスをよくしてくれた。

若かった俺はそれを不快に感じたが先輩の指摘は鋭く的確を射ていた。

それで俺は彼の操縦技術に興味を持って、副座型に乗った時に彼の操縦をじっくりと見て驚いた。

先輩は一見不要と思われる程に細やかなペダリングやスティック捌きを駆使して機体を動かしていた。

近代のMSは優秀な操縦補助システムを搭載しているのに彼はオールドタイプでありながらマニュアルで機体の姿勢制御と連続高速旋回を熟すのだ。

彼の“黒い鷹”の異名は鷹の様に空中高速戦にて敵機を近接格闘の一撃で仕留めるという卓越した超絶技巧の称号なのだ。

まして彼はその技術を他者に惜し気もなく教える。

だが先輩の20年以上のパイロット経験の中でその技術を完全習得出来たのは俺以外誰一人居ないらしい。

しかしながらロビンのひたむきさを考えればもしかすると：

「あいつは馬鹿だ、未熟な己を自覚し過剰な努力をする。まさに熱血馬鹿だ、しかも俺が見たどの熱血馬鹿より大馬鹿野郎だ」

「それは褒めてるのですか？」

「ああ、あの小僧は本当に良いセンスは持っている。まあお前には遠く及ぶんのだが、努力はお前の10倍はしてる。そのくせ成長はお前より全然遅い。馬鹿だろ」

散々ロビンを馬鹿呼ばわりした先輩は楽しそうに笑っていた。

「飲み込みが悪すぎて面白いヤツだよ」

先輩の言葉は本当に聞く人が聞けば激怒される表現ばかりだ。

まあ裏のないストレートな表現なので助言に関してだけ考えればこれ以上はない。

「言い過ぎですよ。ですが弟子とは？」

「ん？ 小僧の方から『弟子にして下さい！』って頭下げてきた」

「それですか」

「面白いガキだよ。俺達に師弟なんざ無いのに、皆仲間の技術を盗んで応用利かせて自分のものにしてる」

おっしゃる通りだ。

俺も同じ黒い鷹だが、強化された身体を頼りに深くペダルを踏み先輩以上の加速Gを振伏せるスタイル。

繊細なペダリングの先輩とは違う。

「そういえばお前のバディは？」

「居ません」

「おいおい隊長だろ。いくら個人主義でもそらねえーよ、早いところ選りなつて」

バディ・システムは軍や隊から押し付けられる規則ではない。

MS隊の者が互いに望み要請して成り立つ。

よって一方が相手にバディを望んでも相手側が拒めばバディは成立しないのだ。

それ故にバディを組まず任務を熟していた異端児も幾つか前例がある。

いわゆる天才というやつだ。

だが俺はそれになりたい訳ではなく、単に誰かに自分の背中を預ける状況を好ましく思わないだけだ。

「俺の意思で選べとなるとあなた以外に望むパイロットはない、ですがグレンから頼まれているのでこの模擬戦を見てから決めようかと」

すると先輩は何に驚いたのか「ちょちょ待った！ 嬉しい言葉の最後にお前何か変な事言ったな？」と俺に詰め寄り問うた。

「頼みってまさかあのサイコ娘か！？ またおっさんはお前にお荷物背負わせるのかよ」

「荷物になるかは分らない、もしかすると俺が彼女の荷物になるかも」

「ハッハッハ、ともかくそうなるなら出撃前に声かけ行かないとな」

先輩は俺の肩へ腕を回してエアロックに導こうとする。

この人は昔からこんな風に何かに付けて人を巻き込む。

「なんで一緒に行くんですか？」

「勘違いすんな。俺は小僧に、お前は娘に試合前の景気付けだ！」

面倒くさ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1382y/>

機動戦士外伝『フィクション』

2011年11月4日04時11分発行